吾妻町の文化財第12集

# 守山地区県営圃場整備事業に係る
# 埋蔵文化財発掘調査報告

1991

長崎県吾妻町教育委員会

吾妻町の文化財第12集

# 守山地区県営圃場整備事業に係る埋蔵文化財の発掘調査報告

1．大　園　遺　跡
2．猫　塚　古　墳
3．犬　塚　古　墳
4．坂　上　遺　跡

1991

長崎県吾妻町教育委員会

# 発刊のことば

本町は島原半島の北部に位置し，霊峰吾妻岳のふもと，有明海に向かって広がる美しい自然，先人のたゆまざる努力によって開かれた風土，これが，わたしたちのふるさと吾妻町です。

本町は，往古より，かなりの人々が定住してきた所であります。それは町内一円から，縄文時代より弥生時代の土器片や，石鏃等が数多く発見されていることからも判ります。

特に今回は，平成２年度の守山地区７工区県営圃場整備事業に伴い，平成元年11月から２年の１月に確認調査，２年７月から８月まで大園遺跡・犬塚古墳・猫塚古墳・坂上遺跡（試掘）の緊急発掘調査が実施された次第であります。調査の結果，古墳時代の土器・石器片，縄文早期の押型文土器片等が数多く出土しておりまして，数千年前の先住民達の生活の跡がしのばれると共に，吾妻町の先史時代の貴重な遺跡であるとの報告を受けました。

その時代から数千年も経た今日の吾妻町を思う時，誠に感慨深いものがあります。今後は町民の埋蔵文化財に対する認識と理解を深め，その保存に努めながら，明るく住みよい町づくりを推進していきたいと思います。

この調査について，守山県営圃場整備事業を振興された島原振興局農林部土地改良課，守山土地改良区の皆様，さらには，確認調査・緊急発掘調査にご協力戴いた地元地権者の皆様，長期に亘って，ご辛労を相かけ，また数々のご教示を戴きました県教育委員会文化課の皆様方に対し衷心より感謝を申し上げ発刊のことばといたします。

平成３年３月30日

吾妻町教育委員会
教育長　島田　力

# 例　　言

1．本書は南高来郡吾妻町守山地区県営圃場整備事業地区内に位置する，埋蔵文化財の発掘調査の報告書である。

2．調査は，平成元年度12月に試掘調査を実施し，その結果をふまえて平成２年７月16日から８月３日までの間本調査を実施した。

3．調査は，吾妻町教育委員会が島原振興局と委託契約を結び，依頼により長崎県教育庁文化課が調査を担当した。試掘調査は，県文化課主任文化財保護主事・藤田和裕・同安楽勉，文化財保護主事・町田利幸・同村川逸朗，文化財調査員・伴耕一郎が，本調査は主任文化財保護主事・安楽勉と文化財調査員・小野ゆかりが担当した。

町教育委員会関係者は次のとおりである。教育長・島田力，教育次長・吉田正博，社会教育係長・本多周太，社会教育係・向島直子

4．収録した遺跡は，大園遺跡・犬塚古墳・猫塚古墳および坂上遺跡試掘調査の概要である。

5．本報告書の執筆は試掘調査の項を藤田が，それ以外の項および写真撮影，編集は安楽による。

6．出土遺物の保管は，吾妻町教育委員会がその任にあたっている。

# 本　文　目　次

Ⅰ　調査に至る経緯……1

Ⅱ　遺跡周辺の立地と環境……3

Ⅲ　調　　査……7

(1)　試掘調査の概要……7

(2)　本調査の概要……8

1　大園遺跡……8

(1)　土　層……8

(2)　遺　構……8

(3)　遺　物……12

①　土　器……12

②　中世の遺物……23

③　その他の石器……27

2　犬塚古墳……27

3　猫塚古墳……28

4　坂上遺跡……29

Ⅳ　ま と め……33

# 挿　図　目　次


第１図　町内遺跡分布図……5
第２図　調査区配置図……9
第３図　土層および遺構実測図……11
第４図　近世遺構平面実測図（１／20）……12
第５図　Ｂ・Ｃ区内遺物出土状況図（１／30）……13
第６図　須恵器実測図　(1)　（１／３）……15
第７図　〃　(2)　〃　……16
第８図　土師器実測図　(1)　〃　……18
第９図　〃　(2)　（１／２）……19
第10図　〃　(3)　〃　……21
第11図　〃　(4)　〃　……22
第12図　中世の遺物実測図　〃　……24
第13図　土錘実測図　〃　……25
第14図　その他の石器実測図　〃　……26
第15図　犬塚古墳実測図　（1／120）……27
第16図　猫塚古墳実測図　（１／120）……28
第17図　坂上遺跡出土の押型文土器実測図（１／３）……30
第18図　〃　の石器（１／２）……32


# 図　版　目　次


図版１　大園遺跡調査近景および調査風景……37
図版２　試掘調査風景……38
図版３　Ｃ区土層……39
図版４　遺構検出状況および中世土壙……40
図版５　遺物出土状況……41
図版６　〃　……42
図版７　犬塚古墳調査風景……43
図版８　猫塚古墳遠景および礫群検出状況……44
図版９　坂上遺跡遠景および遺物出土状況……45
図版10　須恵器(1)……46
図版11　〃　(2)……47
図版12　土師器(1)……48
図版13　〃　(2)……49
図版14　〃　(3)……50
図版15　中世の土器……51
図版16　その他の石器……52
図版17　坂上遺跡の押型文土器……53
図版18　坂上遺跡出土の石器……54

# Ⅰ　調査に至る経緯

雲仙山麓の北西部に位置する吾妻町は，千々石断層が南部に走り，北側にゆるやかに傾斜する火山性特有の景観を有し，渓谷や，沖積平野ありの複雑な様相を呈している。このような複雑な地形は，自然に耕作地にも現れ，旧海岸線の条里遺構が残されている付近を除いては，狭溢な水田や畑地がほとんどである。

そのため吾妻町では，山田地区に次いで昭和59年12月，県営圃場整備事業として守山地区の事業申請を行っている。その後，昭和60年７月には計画決定し，守山土地改良区の設立認可がなされている。

事業の概要によると，田内川水系を中心に帯状に開けた77haの水田地帯と，東側に隣接する台地に開けた46haの畑地帯の受益面積123haを対象に，「大型機械化営農計画に適応する圃場条件に改良するための圃場整備事業を実施し，区画整理，用排水路および道路網を整備して，田畑輪作可能な圃場として協業経営等により規模の拡大を図る」となっている。具体的な工事は１工区から７工区に分かれて，昭和60年度から平成３年度まで工事計画されている。

県文化課では，県耕地課より採択事業一覧の提出を受け，遺跡所在地確認の協議を行った。全体に所在する遺跡は12箇所が知られ，それについての範囲確認調査を実施することになった。最初は２・３・４工区に点散する遺跡の調査を，昭和63年７月から８月にかけて，島原振興局長が吾妻町長に委託して，古田正隆の調査担当で実施[註1]した。

その後，第７工区については平成元年11月現地協議の依頼を受け県文化課から安楽が協議に参加した。その結果表１のとおり８遺跡について調査を実施することが決定した。範囲確認調査は町教育委員会からの派遣申請に基づき平成元年11月27日から12月13日までの日程で実施した。調査結果については表１のとおりである。

範囲確認調査の結果に基づき平成２年２月，圃場整備事業予定地内の埋蔵文化財の取扱いについて協議が行われ，県文化課，島原振興局耕地課，守山土地改良区，吾妻町の５者が参加した。合意事項は，遺物の出土を見た遺跡については極力設計の見直しをするというものであった。同年６月設計変更案について再び協議を行い，次の点を確認した。①猫塚古墳と犬塚古墳については，原形が崩れ過去に部分的に調査が実施され，古墳としての認定がはっきりしていないこともあり，この際，再確認のため全体を調査する。②大園遺跡については，試掘時に柱穴などの遺構や遺物が出土し，中世から古墳時代にかけて広い範囲の出土が予想された。そのため設計変更後は道路敷だけを調査する。③横山古墳については，道路を若干変更し，保存して行くことが決まった。④坂上遺跡と下鬼塚石棺については，両者とも押型文土器が広い範囲から出土するため，設計変更に手間どり，平成３年２月ようやく協議が設けられた。当初，計画では6,600mの要調査範囲であったが，島原振興局と地元関係者の理解と協力により，圃場

の変更と盛土等で660mに変更され，平成3年夏以降に本調査の運びとなっている。

以上が，守山地区圃場整備事業にかかる経緯である。第7工区北側半分については，すでに工事も終っている。遺跡の大半が関係者の御尽力により保存されたことに敬意を表する次第である。

表1　守山地区圃場整備事業地区内にかかる遺跡

| No. | 遺跡名 | 遺跡所在地 | 調査期間 | 面積 | 試掘調査の結果 |
|---|---|---|---|---|---|
| ① | 大園遺跡 | 南高来郡吾妻町本村名字大園 | 11／27～12／14 | 108㎡ | 古墳時代終末から中世の遺物出土。道路部分本調査実施 |
| ② | 横山古墳 | 南高来郡吾妻町本村名字大園 | 12／ 2～12／ 4 | 4㎡ | 現状保存 |
| ③ | 猫塚 | 南高来郡吾妻町本村名字小路 | 12／ 2～12／ 5 | 8㎡ | 全面調査 |
| ④ | 犬塚 | 南高来郡吾妻町本村名字小路 | 12／ 4～12／ 5 | 4㎡ | 全面調査 |
| ⑤ | 蓮光寺跡 | 南高来郡吾妻町本村名字谷頭 | 12／13～12／14 | 12㎡ | 遺構確認出来ず |
| ⑥ | 坂上遺跡 | 南高来郡吾妻町本村名字坂上 | 11／27～12／14 | 196㎡ | 押型文単純層，道路部分本調査実施 |
| ⑦ | 下鬼塚石棺 | 南高来郡吾妻町本村名字下鬼塚 | 12／11～12／14 | 36㎡ | 石棺確認出来ず，押型文層確認，設計変更で保存 |

## Ⅱ　遺跡周辺の立地と環境

有明海に突き出した島原半島は45,871㎢の面積を有し，行政的には１市16町で構成されている。

半島中央部には雲仙岳の主峰をなす普賢岳（1,359m）をはじめ，国見岳（1,347m）妙見岳（1,333m）九千部岳（1,062m）などの千メートルを越える溶岩円頂丘（トロイデ）がそびえ，特別名勝雲仙岳として国立公園に指定されている。また，地形的には大きく雲仙火山地と，南部の南島原台地に区分され，火山性山麓扇状地として放射状に渓谷と台地が発達している。

半島北側に位置する吾妻町の地形は，吾妻岳（869m）を最高点とした二本木川以東の火山裾野が広がる壮年地形と，それ以西の，標高227m付近を頂上とした山田原火山性扇状地（幼年地形）に大別される。

前者の地形は起伏が多く，平坦面が少ないが，標高200m付近の火山の山麓の漸移地帯においては，豊富な湧水が見られ遺跡の立地条件が整っている。河川の流域は谷底平野をつくり，河口付近には肥沃な沖積平野が有明海に注ぐように形成されている。後者は，火山性扇状地のゆるやかな斜面が，愛野町野井と阿母崎へ延び，丘陵末端は旧海岸線と一致していて，高さ10m程の海食崖を形成している。旧海岸線の北端は，江戸時代に開かれた阿母崎新開や，「一工区（いっこく），二工区（にこく）」と呼ばれる明治から昭和にかけての干拓地が拡がりを見せる。従って，この干拓地においては，遺跡の所在をつかむことは難しく，皆無となっている。

町内の主要な遺跡について概観してみよう。

今のところ一番古い遺跡は，旧石器時代のナイフ形石器などが確認された，標高220mに位置する弘法原遺跡があげられる。昭和55年から57年度にかけて実施された発掘調査では，この他に押型文土器の良好な包蔵地であることが判明，縄文時代早期の重要な遺跡[註2]となっている。この他には中熊台地遺跡や，今回試掘調査を行った坂上遺跡があげられる。縄文中期の遺跡は現在のところ確認されていない。島原半島では，この時期の遺跡は数える程で，愛野町愛津遺跡や島原市三会海中干潟[註3]など，海岸線の遺跡に見られる。縄文後晩期の遺跡は浜津，川床から御領式が出土したとの報[註4]がある。また，昭和54年干拓地のかさあげ，圃場整備事業に伴う採土地として調査された中熊台地でも[註5]，十字形石器と一緒に御領式土器や，黒川式土器が出土している。ここは弥生時代の遺構や遺物も見られ，中期の埋葬墓10基が確認されている。埋葬遺構は，この他にも吾妻中学校の校舎建設中に発見された甕棺墓などがあげられる。

古墳時代の遺跡は急に増え，21遺跡を数える。生活遺跡として明確にされているものは少ないが，墳墓としては，前方後円墳，円墳，石棺形態のものがある。前方後円墳は，旧海岸線近くの平野部標高18mに位置する守山大塚古墳に代表される。現全長70mを測り，県本土部では最大値を示す[註6]。しかし，現在墓地として利用されており，築造当時からするとかなりの変化を

きたしている。円墳は瑞穂町と境界をなす低位段丘地形上に点在するが，現在は，破壊もしくは消滅してしまったものも多い。杉山古墳や，すぐ東側の瑞穂町に属するコロ松古墳，それに本書収録の古墳等もそうである。また，封土を持たない石棺の記録もある。浜津石棺は，現国道251号の前身である県道布設工事の際の採土地となり発見されたもので，その後にも調査され「箱式石室が東方に向って（道租崎の入江に向って）築造され，片袖横穴式古墳様の入口を持つ構造であることが判った」とされ[註7]ている。この他にも，横田石棺が守山横田墓地で検出されているが，実測図等から推測すると，弥生終末から古墳初期のものと思われる。石棺の出土地は，6箇所が記録されているものの実態が把握できないものもある。

「肥前国風土記」によれば，驛（うまや）は奈良天平期まで肥前国内に18箇所が設置され，県内では彼杵郡2箇所，高来郡4箇所が記してあるが，具体的には不明である。さらに「延喜式（兵部省）」には「山田駅」の記述が見える。現山田地区を指すものか具体性に欠けるが，太宰府を起点とする西海道の駅路が船越，山田，野島と島原半島を繋いでいることから，古代においても重要な位置を示めていたと思われるのである。また，律令体制下の中で古代の圃場整備とも言われる条里遺構は各地にその名残をとどめているが，島原半島でも瑞穂町伊古，国見町神代・土黒に見られ，本町でも守山条里遺構が広い範囲に残る。

以上のように，旧石器時代から歴史時代に至るまで築かれてきた古代人の足跡は，歴史の進展にあわせて，たゆまなく営まれてきたことが窺えるのである。

## 引　用　文　献


註1．古田正隆　『守山地区県営圃場整備事業に伴う渓谷と水流条件という旧地形に人間生活の立地を研究する調査概報』　吾妻町の文化財10　1988

註2．高野晋司編　『弘法原遺跡』　吾妻町の文化財　1983

註3．古田正隆　『島原市の海中干潟遺跡』　（図録）島原市三会下町，安中中南，百人委員会　1974

註4．吾妻町『吾妻町史』

註5．吾妻町教育委員会　『中熊台地調査報告』　―大塚弥生埋葬遺跡調査報告―　吾妻町の文化財4

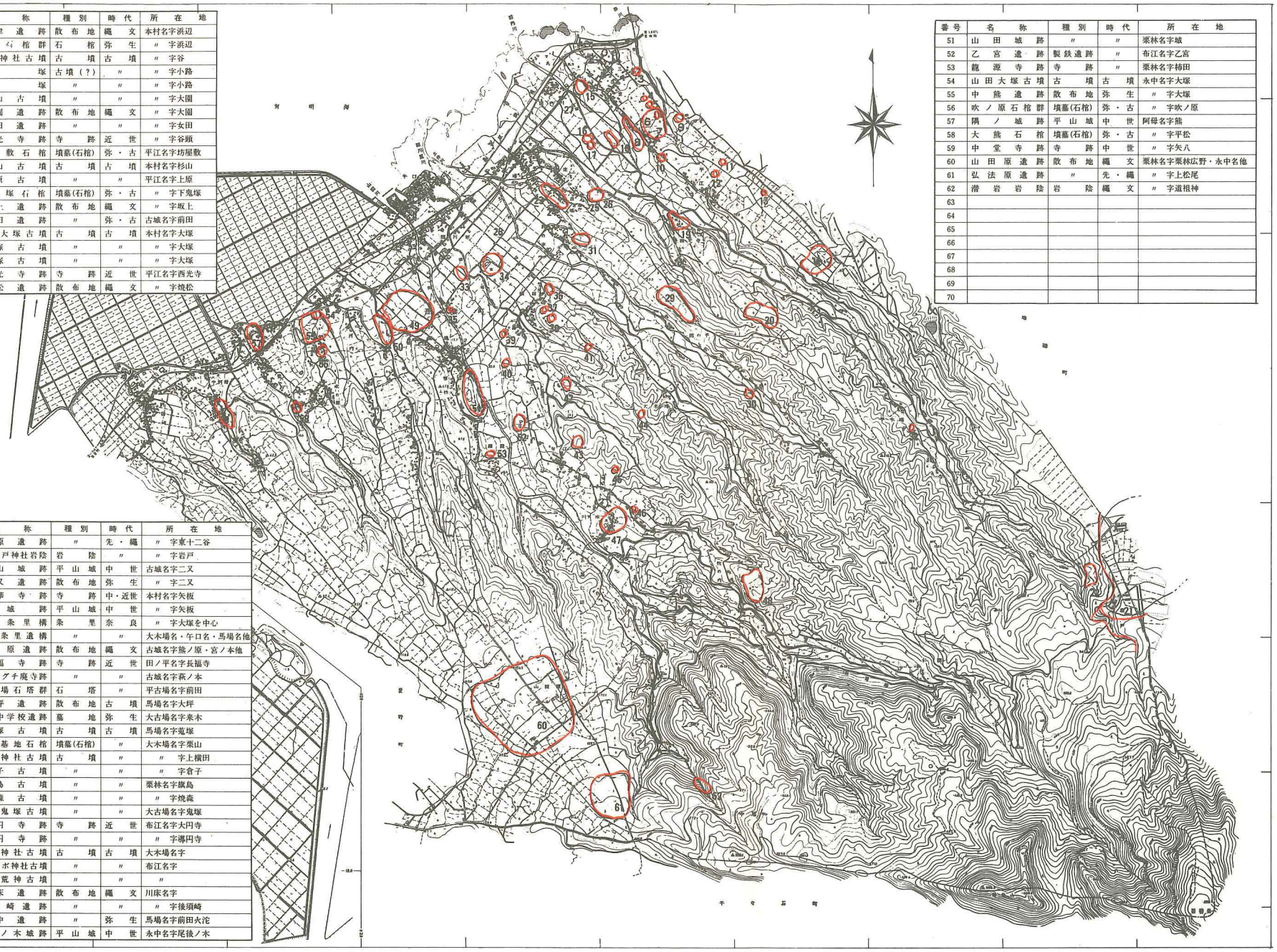
註6．平成2年度県内古墳詳細分布調査で測量などの記録をする。

註7．註4に同じ

| 番号 | 名称 | 種別 | 時代 | 所在地 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 浜津遺跡 | 散布地 | 縄文 | 本村名字浜辺 |
| 2 | 浜津石棺群 | 石棺 | 弥生 | 〃 字浜辺 |
| 3 | 剣柄神社古墳 | 古墳 | 古墳 | 〃 字谷 |
| 4 | 猫塚 | 古墳（？） | 〃 | 〃 字小路 |
| 5 | 犬塚 | 〃 | 〃 | 〃 字小路 |
| 6 | 横山古墳 | 〃 | 〃 | 〃 字大園 |
| 7 | 大園遺跡 | 散布地 | 縄文 | 〃 字大園 |
| 8 | 女田遺跡 | 〃 | 〃 | 〃 字女田 |
| 9 | 蓮光寺跡 | 寺跡 | 近世 | 〃 字谷頭 |
| 10 | 坊屋敷石棺 | 墳墓(石棺) | 弥・古 | 平江名字坊屋敷 |
| 11 | 杉山古墳 | 古墳 | 古墳 | 本村名字杉山 |
| 12 | 上原古墳 | 〃 | 〃 | 平江名字上原 |
| 13 | 下鬼塚石棺 | 墳墓(石棺) | 弥・古 | 〃 字下鬼塚 |
| 14 | 坂上遺跡 | 散布地 | 縄文 | 〃 字坂上 |
| 15 | 前田遺跡 | 〃 | 弥・古 | 古城名字前田 |
| 16 | 守山大塚古墳 | 古墳 | 古墳 | 本村名字大塚 |
| 17 | 丸塚古墳 | 〃 | 〃 | 〃 字大塚 |
| 18 | 長塚古墳 | 〃 | 〃 | 〃 字大塚 |
| 19 | 西光寺跡 | 寺跡 | 近世 | 平江名字西光寺 |
| 20 | 焼松遺跡 | 散布地 | 縄文 | 〃 字焼松 |

| 番号 | 名称 | 種別 | 時代 | 所在地 |
|---|---|---|---|---|
| 21 | 西原遺跡 | 〃 | 先・縄 | 〃 字東十二谷 |
| 22 | 守山岩戸神社岩陰 | 岩陰 | 〃 | 〃 字岩戸 |
| 23 | 守山城跡 | 平山城 | 中世 | 古城名字二又 |
| 24 | 二又遺跡 | 散布地 | 弥生 | 〃 字二又 |
| 25 | 源華寺跡 | 寺跡 | 中・近世 | 本村名字矢板 |
| 26 | 向城跡 | 平山城 | 中世 | 〃 字矢板 |
| 27 | 守山条里構 | 条里 | 奈良 | 〃 字大塚を中心 |
| 28 | 山田条里遺構 | 〃 | 〃 | 大木場名・午口名・馬場名他 |
| 29 | 熊ノ原遺跡 | 散布地 | 縄文 | 古城名字熊ノ原・宮ノ本他 |
| 30 | 長福寺跡 | 寺跡 | 近世 | 田ノ平名字長福寺 |
| 31 | ガランゲチ廃寺跡 | 〃 | 〃 | 古城名字萩ノ本 |
| 32 | 平古場石塔群 | 石塔 | 〃 | 平古場名字前田 |
| 33 | 大坪遺跡 | 散布地 | 古墳 | 馬場名字大坪 |
| 34 | 吾妻中学校遺跡 | 墓地 | 弥生 | 大古場名字来木 |
| 35 | 蒐塚古墳 | 古墳 | 古墳 | 馬場名字蒐塚 |
| 36 | 横田基地石棺 | 墳墓(石棺) | 〃 | 大木場名字栗山 |
| 37 | 堤刀神社古墳 | 古墳 | 〃 | 〃 字上横田 |
| 38 | 倉子古墳 | 〃 | 〃 | 〃 字倉子 |
| 39 | 旗島古墳 | 〃 | 〃 | 栗林名字旗島 |
| 40 | 焼森古墳 | 〃 | 〃 | 〃 字焼森 |
| 41 | 布江鬼塚古墳 | 〃 | 〃 | 大古場名字鬼塚 |
| 42 | 大円寺跡 | 寺跡 | 近世 | 布江名字大円寺 |
| 43 | 導円寺跡 | 〃 | 〃 | 〃 字導円寺 |
| 44 | 恩塚神社古墳 | 古墳 | 古墳 | 大木場名字 |
| 45 | 布江ヤボ神社古墳 | 〃 | 〃 | 布江名字 |
| 46 | 川床荒神古墳 | 〃 | 〃 | 〃 |
| 47 | 川床遺跡 | 散布地 | 縄文 | 川床名字 |
| 48 | 後須崎遺跡 | 〃 | 〃 | 〃 字後須崎 |
| 49 | 永中遺跡 | 〃 | 弥生 | 馬場名字前田大沱 |
| 50 | 尾後ノ木城跡 | 平山城 | 中世 | 永中名字尾後ノ木 |

| 番号 | 名称 | 種別 | 時代 | 所在地 |
|---|---|---|---|---|
| 51 | 山田城跡 | 〃 | 〃 | 栗林名字城 |
| 52 | 乙宮遺跡 | 製鉄遺跡 | 〃 | 布江名字乙宮 |
| 53 | 龍源寺跡 | 寺跡 | 〃 | 栗林名字柿田 |
| 54 | 山田大塚古墳 | 古墳 | 古墳 | 永中名字大塚 |
| 55 | 中熊遺跡 | 散布地 | 弥生 | 〃 字大塚 |
| 56 | 吹ノ原石棺群 | 墳墓(石棺) | 弥・古 | 〃 字吹ノ原 |
| 57 | 隅ノ城跡 | 平山城 | 中世 | 阿母名字熊 |
| 58 | 大熊石棺 | 墳墓(石棺) | 弥・古 | 〃 字平松 |
| 59 | 中堂寺跡 | 寺跡 | 中世 | 〃 字矢八 |
| 60 | 山田原遺跡 | 散布地 | 縄文 | 栗林名字栗林広野・永中名他 |
| 61 | 弘法原遺跡 | 〃 | 先・縄 | 〃 字上松尾 |
| 62 | 滝岩岩陰 | 岩陰 | 縄文 | 〃 字道祖神 |
| 63 | | | | |
| 64 | | | | |
| 65 | | | | |
| 66 | | | | |
| 67 | | | | |
| 68 | | | | |
| 69 | | | | |
| 70 | | | | |




第１図　町内遺跡分布図

# Ⅲ 調　　査

## (1) 試掘調査の概要

大園遺跡・蓮光寺跡・坂上遺跡についての試掘調査は，平成元年11月28日から開始した。圃場整備の計画地域内での遺構，遺物包含層などの有無やその状況について確認することを目的とし，基本的には２ｍ×２ｍの大きさの試掘壙を設定して調査を行った。また，同計画地域内に横山古墳のほか，猫塚・犬塚などの積石塚と思われるものもあり，合わせて確認することとなった。試掘壙には，これらの遺跡や古墳が同一の，また隣接する地域であることから，通し番号を付けることにし，合計33箇所での試掘調査を実施した。以下，各地域での概要について述べる。

・大園遺跡は，馬鈴薯の収穫が終わった畑から調査にかかり，27箇所の試掘壙を設定した。ここでは，表土から第３層の黄褐色粘質土層まで，土師器・須恵器のほか中世の青磁などが出土した。数は少ないものの，縄文土器や黒曜石なども見られ，広い範囲にはいたっていない。ただ，第９・第13試掘壙からは，多くの土師器や須恵器が出土し，柱穴と考えられる遺構も確認され，生活の跡が残っている可能性が窺われた。

・蓮光寺跡は，谷を隔てて大園遺跡の東側にある。ここでは３箇所を試掘したが，岩盤までは浅く，寺院の痕跡などの遺構は認められなかった。少量ではあるが，黒曜石の石鏃や剝片が出土したが，文化層として確認するにはいたらなかった。

・横山古墳の墳丘の裾の部分に，１ｍ×４ｍの試掘壙を設定したが，表土層に土師器や須恵器などの破片が混入しているのみで，古墳に関係するような遺構は確認できなかった。

・猫塚と犬塚は，墳丘に隣接する場所を試掘したが，いずれも岩盤まで浅く，ここでも土師器や須恵器の小破片が出土したのみで，古墳に関係のある遺構は認められなかった。（藤田）

坂上遺跡は標高102～114ｍのなだらかな，有明海が一望できる台地上に立地する。ここでは25ｍの間隔で，２ｍ×２ｍの試掘壙49箇所設定，標高の高い所から低いところへと順に番号を付した。

その結果，49箇所の試掘壙のうち，33箇所から縄文時代早期の押型文土器と石器類が出土した。この付近の地形は，浅い谷を狭んで二つのなだらかな台地から成り，遺跡はこの地区に集中する。また坂上遺跡から300ｍ程北方の，標高86ｍ～90ｍの所に下鬼塚石棺の記録があり，５箇所の試掘壙を入れたが，石棺は確認できなかった。しかし，坂上遺跡と同じように押型文土器の出土があり，ここまで遺跡の拡がりが確認された。

この地区における圃場整備の計画は，遺跡保存のため大幅な計画変更が行われ，道路部分660㎡について，平成３年度本調査が実施される予定である。

## (2) 本調査の概要

試掘調査の結果，ＴＰ９および13を中心とする範囲に遺物が集中し，本調査の必要が生じた。しかし，協議の結果，遺物の集中する部分については，圃場整備の設計の見直しが行われ，回避されることになった。ただ，道路部分については変更が出来ず，農道幅７ｍ×長さ36ｍについて本調査を実施することになり，調査区は６ｍ×６ｍを１区画としてＡ～Ｆまで設定した。

また猫塚・犬塚については，試掘調査でも遺構の確認はできなかったが，工事計画では削平されるため，全面調査を行うことになった。

なお，横山古墳も試掘調査では積石があり，実態がよくわからなかったが，道路計画を若干変更して保存することになった。

### 1　大園遺跡

遺跡は標高24ｍ～30ｍの広い範囲に中世の遺物や土師器片・須恵器片・黒曜石剝片などが散布する。縄文早期押型文土器採集の報告もあるが，今回は確認できなかった。しかし，縄文土器と思われる破片の出土はわずかながら少数のＴＰで見られた。

本調査は，試掘調査で遺構・遺物が確認されていたＴＰ９と13を中心とした地点に道路が計画され，設計の変更が出来なかったために道路幅だけを発掘調査したものである。その結果，須恵器や土師器を中心に多くの遺物が集中して出土，またその下部から遺構も検出され，古代から中世にかけての遺跡であることが判明した。

以下，調査で得られた内容について述べる。

#### (1) 土　　層

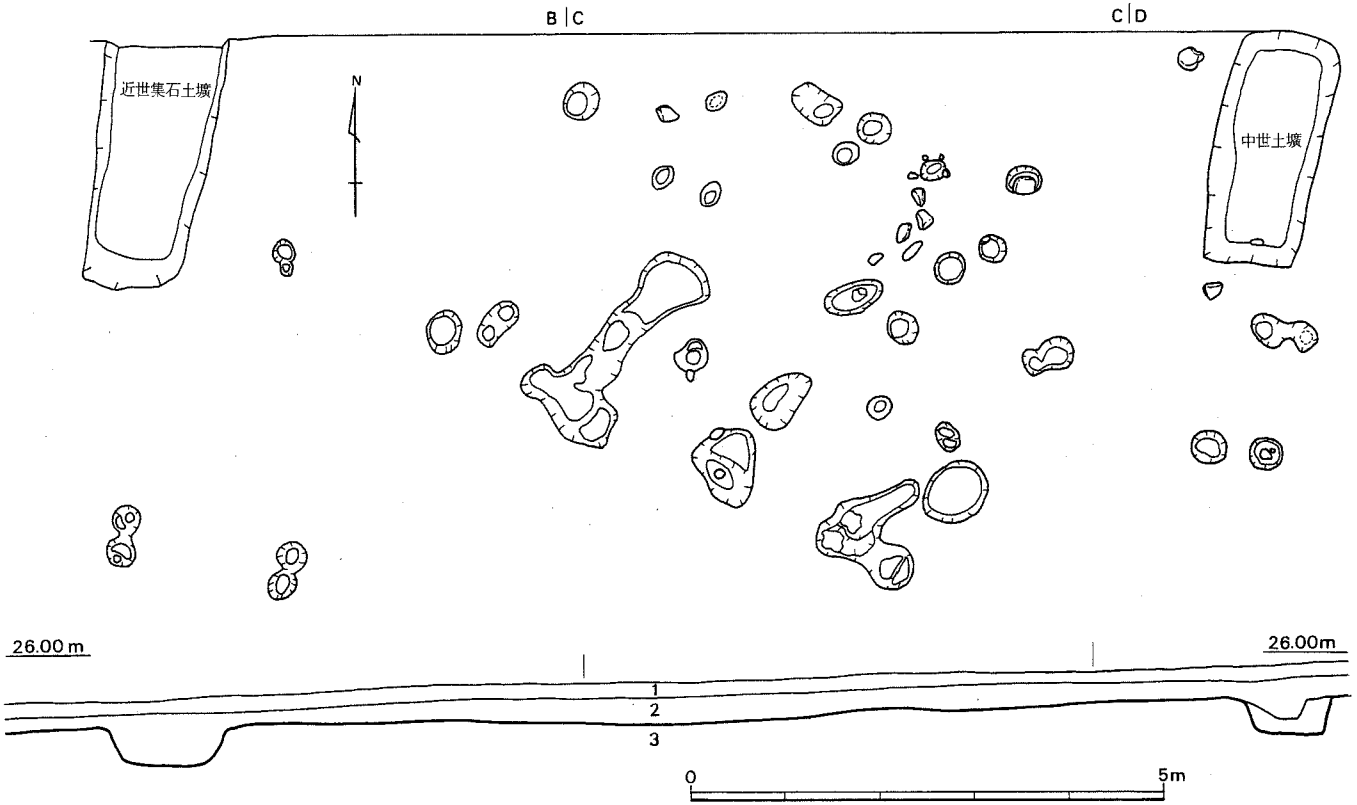
試掘調査壙は広い範囲にわたり設定したが，層位は基本的に３層から成り変化することはない。標高100ｍ付近に設定した坂上遺跡の層位は，火山灰層があきらかに堆積している。しかし，標高26ｍに位置する本遺跡では，坂上遺跡に見られるような黄色と黒色の層が交互に堆積した火山灰層は見られない。

１層表土層の下は２層の暗褐色土層である。上面は粘性が弱いが，下面は赤味が強くなり粘性を増す。古墳時代の遺物もこの層に包含される。３層は黄褐色粘質土，粘質が強まり遺物は含まない。遺構はこの層まで掘り込まれている。

#### (2) 遺　　構

Ａ区からＧ区の調査区の中で，遺構が集中するのはＡ～Ｄ区でありそれより南は希薄になる。一番多く検出されたのが柱穴である。大小62個を数えるが，建物として復原されるものはない。柱穴はＣ区に集中しており，遺物もこの上に多く出土する。Ｄ区には長さ220㎝，幅110㎝，深さ40㎝程のほぼ長方形の土壙が検出された。中からは中世の土師器片が出土している。またＢ区では長さ260㎝＋α，幅約120㎝の長方形の土壙に拳大の礫が多量につめ込まれている。当初

第２図　調査区配置図




1層表土層　2層暗褐色土層　3層黄褐色粘質土層

第3図　土層および遺構実測図

第4図　近世遺構平面図

は礫の表面に瓦質土器が見られたため中世の遺構と思われたが，掘り下げると近世陶磁器が数点出土した。土層観察では1層から掘り下げられており，どうも邪魔になる畑の礫を集め深く埋めたらしい。

### (3) 遺　　物

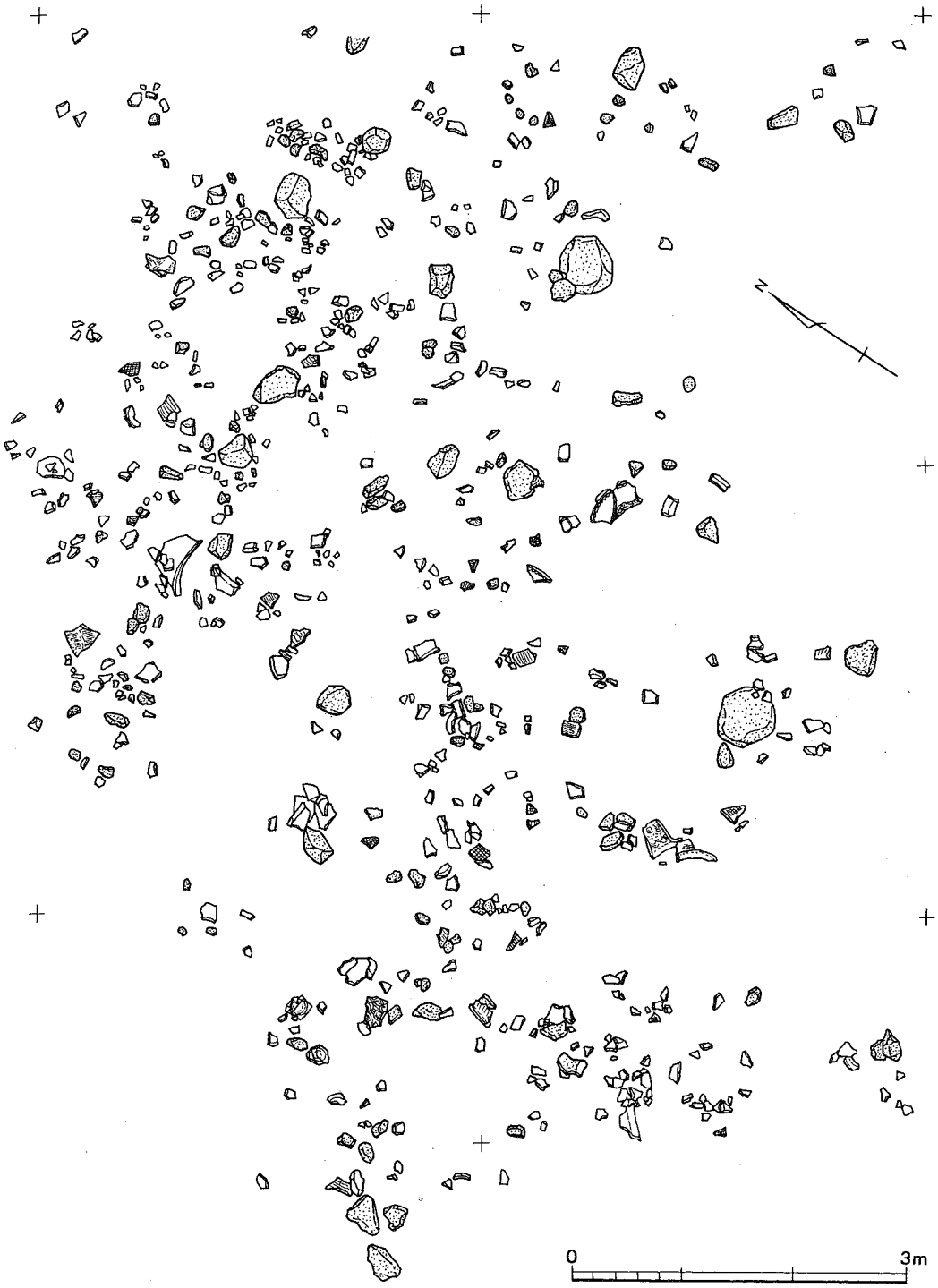
大園遺跡における遺物は須恵器，土師器を中心とした古墳時代終りごろのものが中心である。これに次ぐものに中世の土器がある。量的には少ないが，中心を離れているためであろう。古田正隆氏の報告によれば，この地区からは押型文土器や黒曜石，玄武岩の破片も採集されている。押型文土器については今回確認されていない。旧石器の遺物と石鏃がわずかに採集されている程度である。

#### ①　土　　器

須恵器と土師器が殆どで，出土層位は2層暗褐色土層からである。遺物の出土範囲は猫塚と犬塚のやや東側の間に位置したところで，あまり広い面積ではない。須恵器と土師器の割合は，後者の方が多くを占める。

**須恵器**（第6・7図1～18）

1は高台付の椀である。口縁はわずかに外反し，やや尖がり気味におさめられている。器壁には空気が残ったため断面ははじけ，ふくらみ部が多くみられ形状もいびつである。高台は貼り付けで外にわずかに聞き断面四角形である。ロクロ成形で低部はヘラ切り離しが行われている。2は底部を欠くが1と同様高台を有すると思われる。底に近い部分がゆるく張り出し，胴



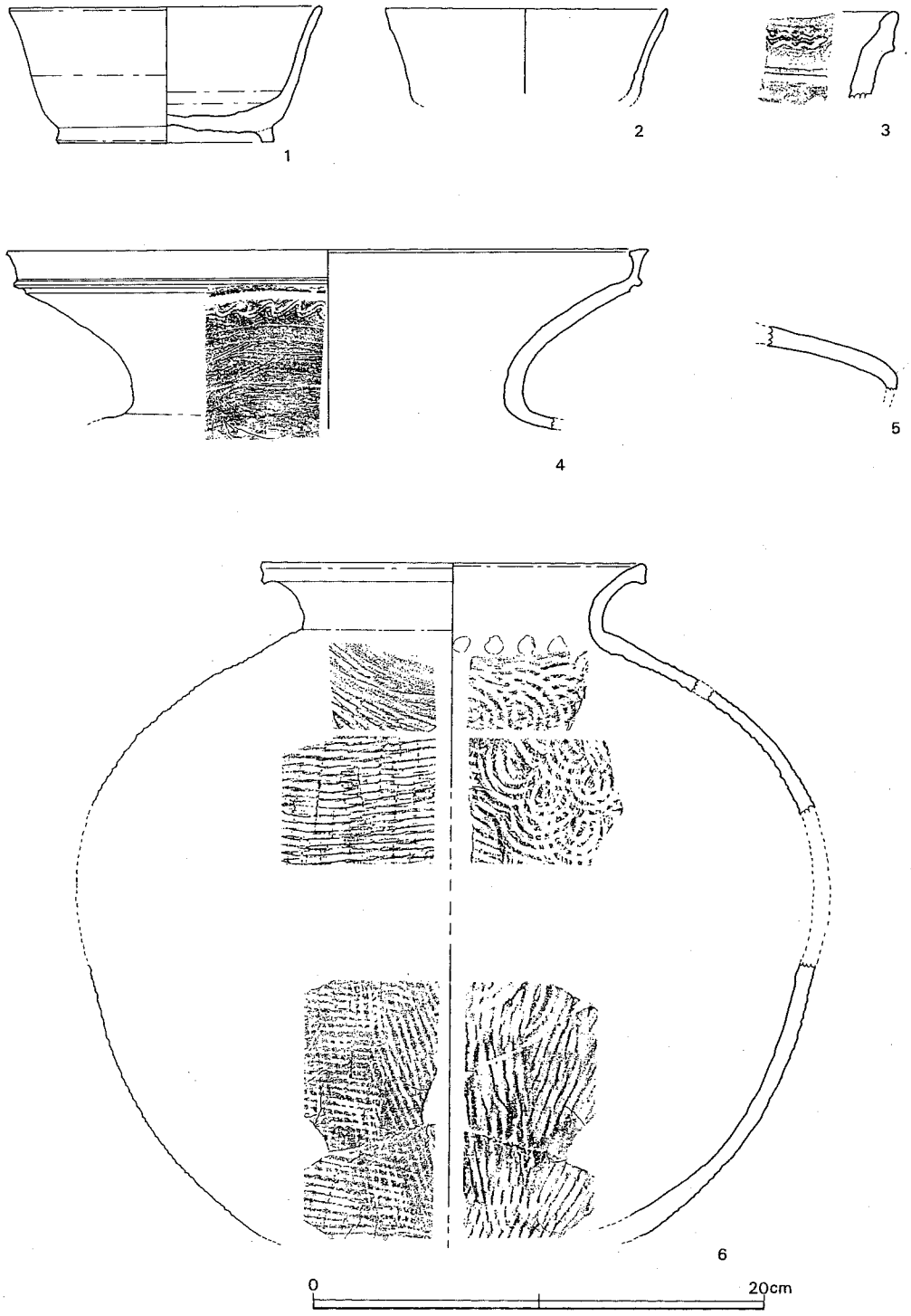

第５図　Ｂ・Ｃ区内遺物出土状況図

部がしまり口縁はやや外反している。柱穴からの出土である。3は甕口縁部で突帯が巡り，頸部はしまりこの部分に弱い波状沈線が2本施される。焼成は良好で内面には自然釉がわずかに残る。4は大型の甕口縁部である。口唇部は平坦に仕上げ内傾する。頸部までの立ち上がり部はT字形に頂部が張り出し，内外面ともカーブする。口縁と頸部は突起があり，上下に沈線が巡る。その直下には2本の沈線による波状文が1単位施されている。頸部はよくしまり，胴部に張り出す部分で欠失している。全体はロクロ仕上げ，頸部外面は格子目叩きのあとミズビキ整形されているが，叩痕がわずかに残る。胴部内面には同心円状の叩痕が残る。外面には全体に自然釉がかかり黒色を呈する。口径37㎝。5は長頸の壺になると思われる肩部の破片である。外面には自然釉が全体にかかっている。6はバラバラに割れているが，接合により1個体である可能性が強い。口縁はやや尖がり気味におさめられ，三角状の稜線をもち，そこから大きく屈曲している。胴部外面には長方形状格子目の叩きが，体部下端の底部近くでは，さらに上からタテに叩きを施している。内面には頸部屈曲部に指頭痕が残り，さらに同心円文の叩きが全体に見られる。下部では平行条線叩きの上からさらに同心円の叩きが施されている。復原口径は約22㎝を測る。

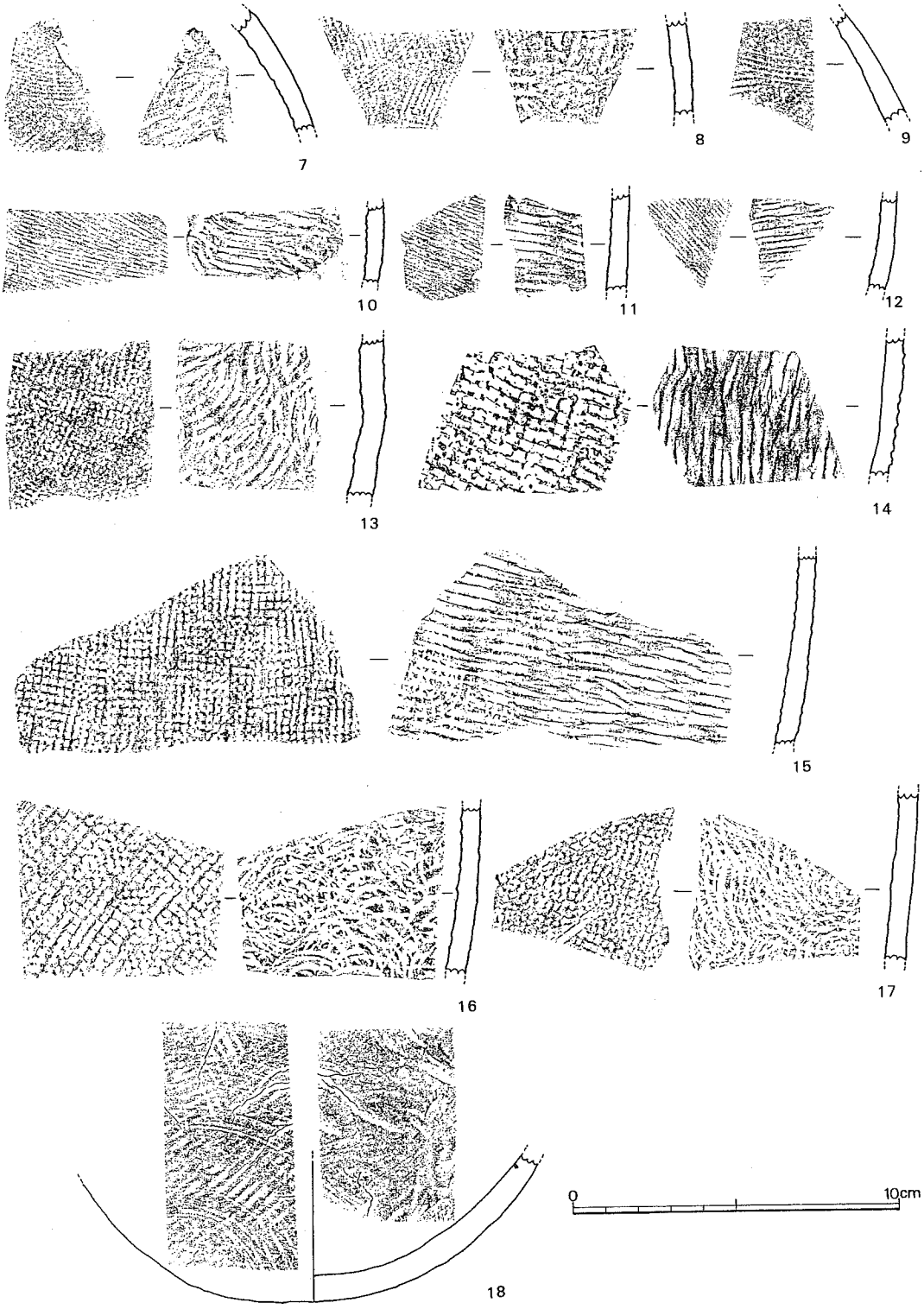
以上の6点は器形の特徴をよく残し，個々について説明を加えたが，第7図7～18については須恵器胴部の各種文様である。

7～9は胎土・焼成・文様の構成から同一個体と思われる。外面には，格子目叩きを施し，その上から軽くナデ調整している。さらにロクロ回転により浅い沈線を意識して付けている。内面には同心円の叩きが付けられるが，生乾きの早い時期に行われた状況が見られる。10～12は外面が刷毛目の調整痕が丁寧に施され，内面には平行条線叩きに同心円文が重なる。色調は外面が暗灰色，内面が茶褐色を呈している。13～17は外面に彫りの深い格子目叩きが全体に見られる。格子目も細かく3種類に区別できる。内面は平行条線叩き，あるいは条線のあとに同心円叩きをつけたものなどが見られる。なお16は外面が茶褐色，内面は灰色，17は外面が明灰色，内面は褐色を呈する。18は甕丸底で，全体に平行条線叩きが施され，さらに，その上からヘラをあてロクロを廻している。そのため細い線が多くはいる。一番底部はヘラ切りで離されている。

時期の決定についてであるが，本県では須恵器窯の発見は皆無である。そのためここでは有明海を挟んで指呼の間に位置する熊本県の須恵器窯跡の調査による編年に従う。それによると，小田富士雄氏の9期区分を用いている。本遺跡の出土甕などに最も近い窯は，荒尾市周辺の荒尾窯跡群があげられるが，なかでも川登の暁町窯のものと類似するが，それによると第Ⅷ様式で800年前後の年代観である。




第 6 図　須恵器実測図(1)




第７図　須恵器実測図(2)

**土師器**

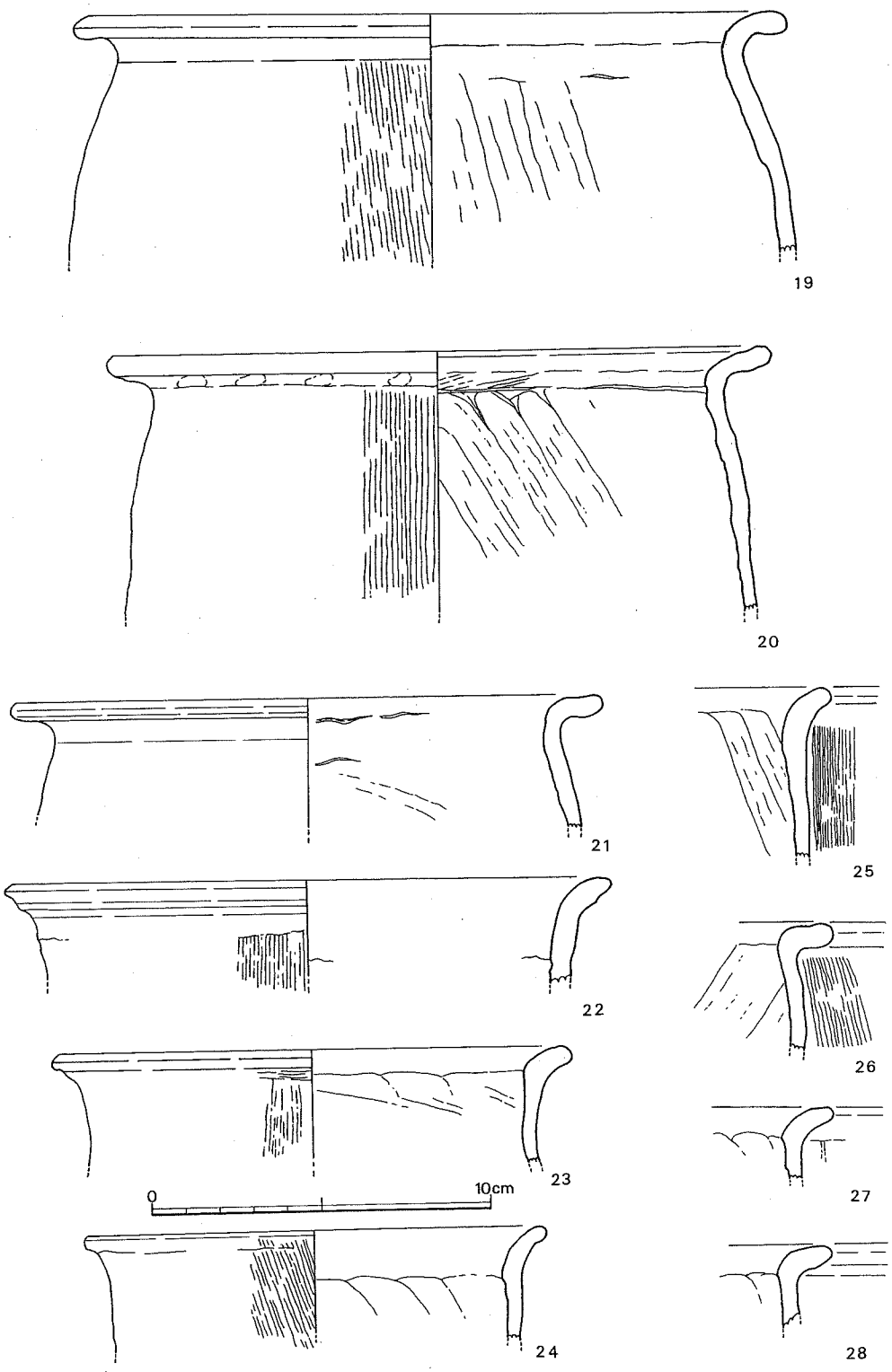
多量に出土している訳ではないが，甕・坏・皿・鉢などを主体に出土している。出土範囲が限られているからだろうか。甑やカマドといったいわば大型の生活に密着したものは見られない。

**甕**（第８図19～28）

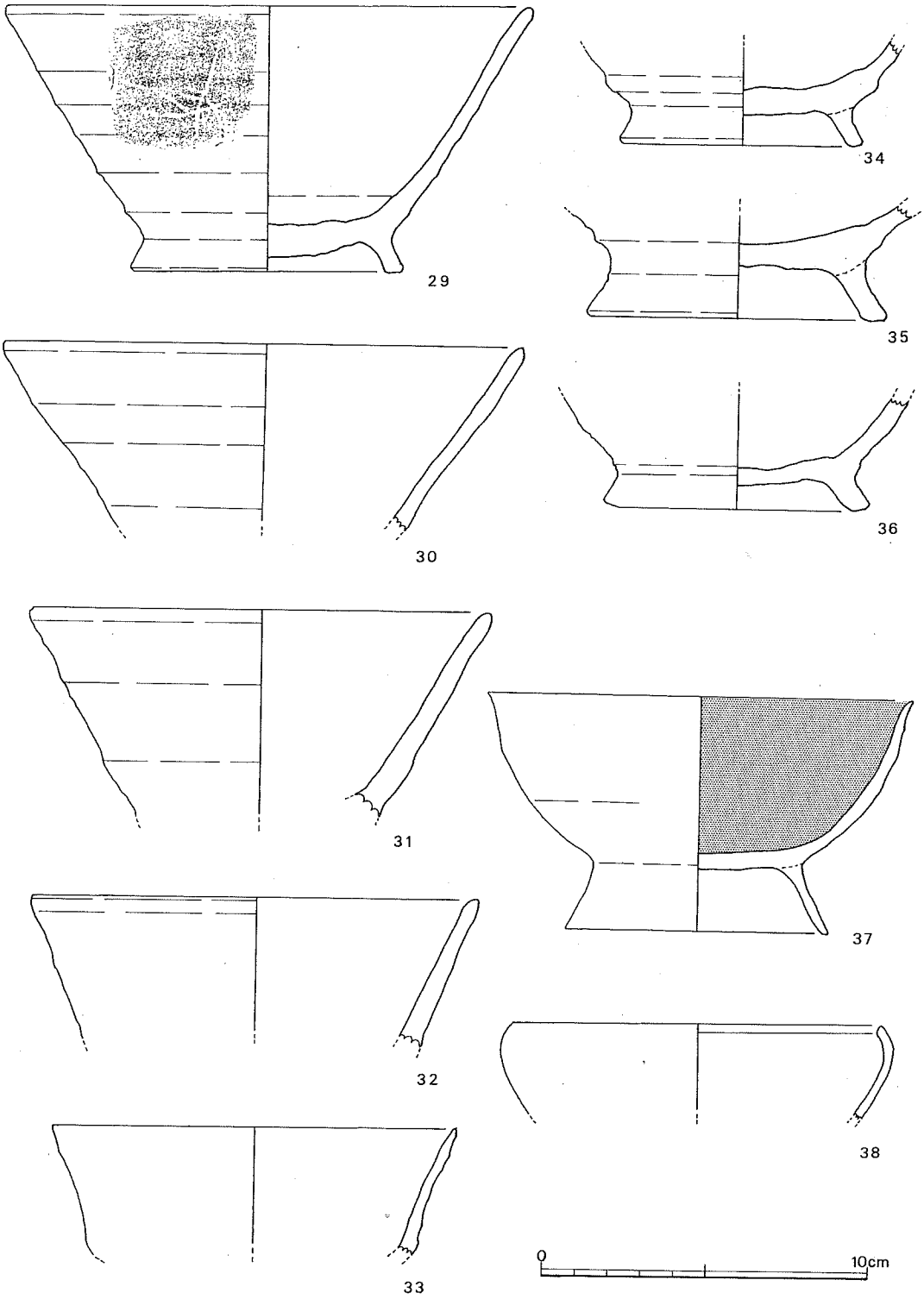
基本的には外面胴部には刷毛目，内側には削りを基本としている。焼成には若干の差があるものの，胎土にも共通点が多い。胎土に含まれているものは角閃石，石英，白と茶の砂粒，そして雲母片がわずかに混じる。形状的にはわずかに用途に応じて変化している。19は頸部がよくしまり，口縁は強く外反し，端部はふくらみをもちながら丸くおさめられている。体部外面にはやや粗目の刷毛目調整を受け，内面は下方向から上へ削られている。口縁部の内外には丹塗り痕をわずかに溜めている。胴部はゆるく張り出し，口縁部径よりわずかに大きい。復原口径31.5㎝を測る。20は前者より器壁が全体的にうすい。口縁部は外反するが，やや立ち気味である。頸部から口縁にかけては指頭整形で凹凸がある。体部外面は粗い刷毛目がほぼ垂直に施され，内面頸部にも刷毛目が見られる。その直下には浅い沈線があり，胴全体下から上方向に削られている。口縁径29.2㎝を測る。21は19の形状に似るが磨耗著しく体部外面の刷毛目はかすかに残る程度で，内面の削りの方向も不明である。復原口径26㎝を測る。22は口縁部が短く外反し，頸部との区別がつかない。口縁外側は頸部との間がわずかに凹み，体部に至って刷毛目が見られるが，頸部はナデ消しが行われ，くびれている。内面は指頭整形され，削りがわずかに残る。23は口縁部が短く外反し，頸部はナデ，その下から刷毛目が入る。内面は右から左の横方向に削られ，器面をうすく仕上げられている。復原口径23㎝を測る。24・25は口縁部が立ち，わずかに外反するだけで胴部のふくらみもあまり見られない。口縁外面直下から刷毛目が施され，下から上方向に削られている。26は口縁がほぼ直角に折れ，平坦面を作る。端部にかけて両側がわずかにふくらむ。外面は刷毛目が明瞭に残り，内面も削り痕が下から上へ粗く残る。27はほぼ23と同一の形状。28は21と同様の特徴をもつ。

**椀**（第９図29～37）

椀には高台付と高台が無いものがある。本遺跡で椀としてはっきりしているものを図示した。29は体部を一部欠失するが，ほぼ完形に復原できる。高台付椀である。高台は断面四角形で外側に開く，胴部は立ちあがりからほぼ直線で外側に開き，口縁端部は丸くおさめられている。外面はロクロ削りのため，ゆるい段が付く。胴部中程にやや黒色の部分に「大」の字を逆にしたようなものが，弱い線刻で描かれているのが残る。焼成前に付けられたものと思われる。30～33は破片だけの図上復原である。31，32は高台付と思われるが，33は不明である。33は体高が低く下部にふくらみをもつ。すべてロクロ仕上げである。34～36の高台は体部を欠失するが，前者の土師器とは胎土・焼成においても異質のものである。先ず，高台は外側に反り返るように張り出し，貼り付けたあとロクロ整形が行われている。そのため底部のヘラ切りは中央部に




第８図　土師器実測図(1)




第９図　土師器実測図(2)

わずかに残るだけになっている。形状は胴部が丸くふくらむもので，時期的には後続するものである。37は内黒椀である。胎土は精選され，繊細な滑石粉末を加えているため表面はなめらかである。

**黒色土器**（第９図37）

ロクロで器壁はうすく仕上げ，高台は貼り付けで高く，外反している。立ち上がりから体部は丸くふくらみ，口縁にわずかな反りをもたせ尖がり気味におさめている。内面は全体を黒くして磨いている。外面は黄褐色を呈し，器高7.2㎝，口径13㎝を測る。内黒椀は低い高台付のものがもう１点出土しているが，器形・胎土は前者と違ったものである。

**鉢**（第９図38）

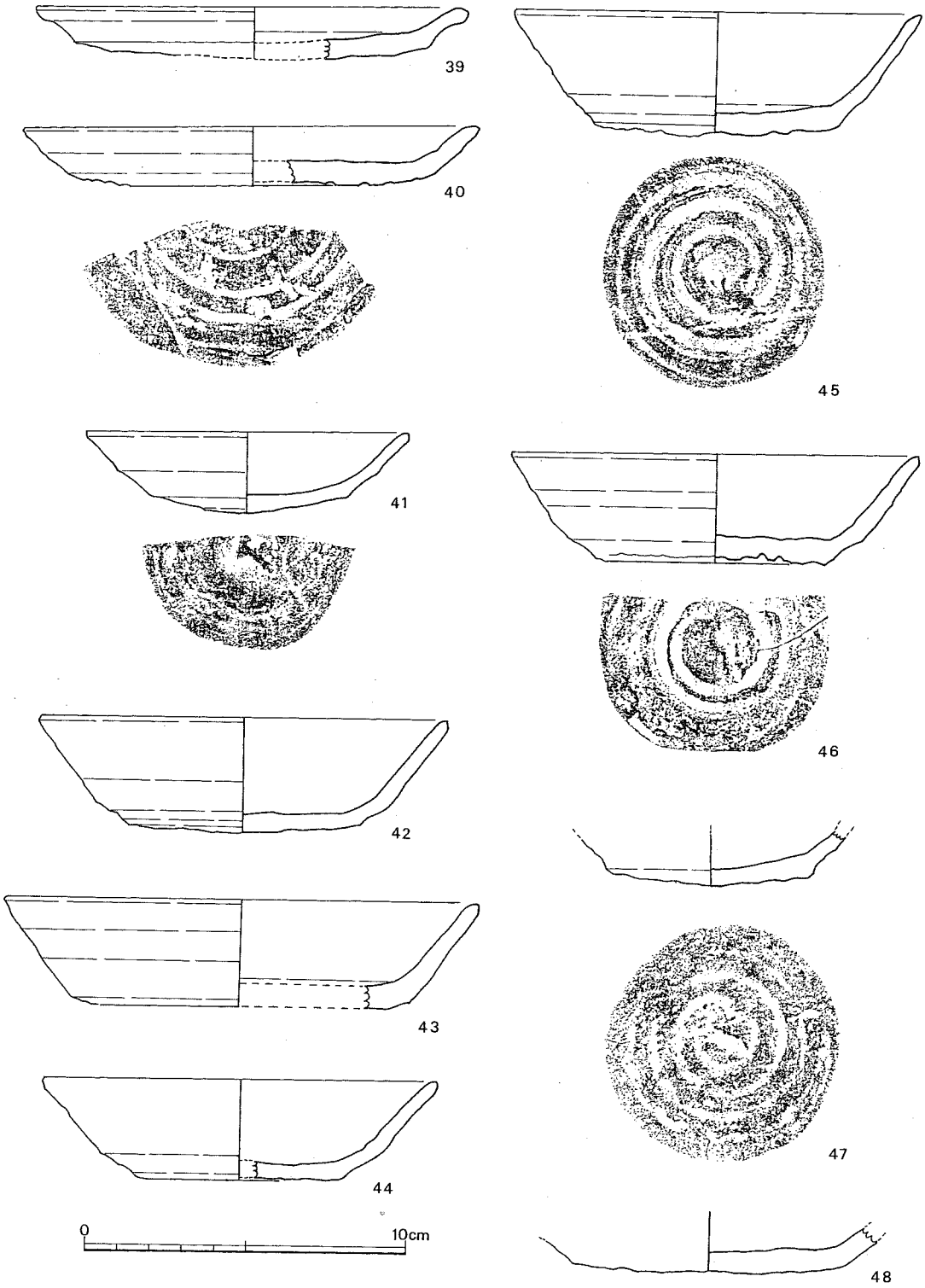
椀とも皿とも違う器形で鉢として取り扱った。口縁は丸くおさめられ，直下で内湾している。器壁はうすく内外とも磨かれている。復原口径11㎝を測る。

**皿**（第10図39・40）

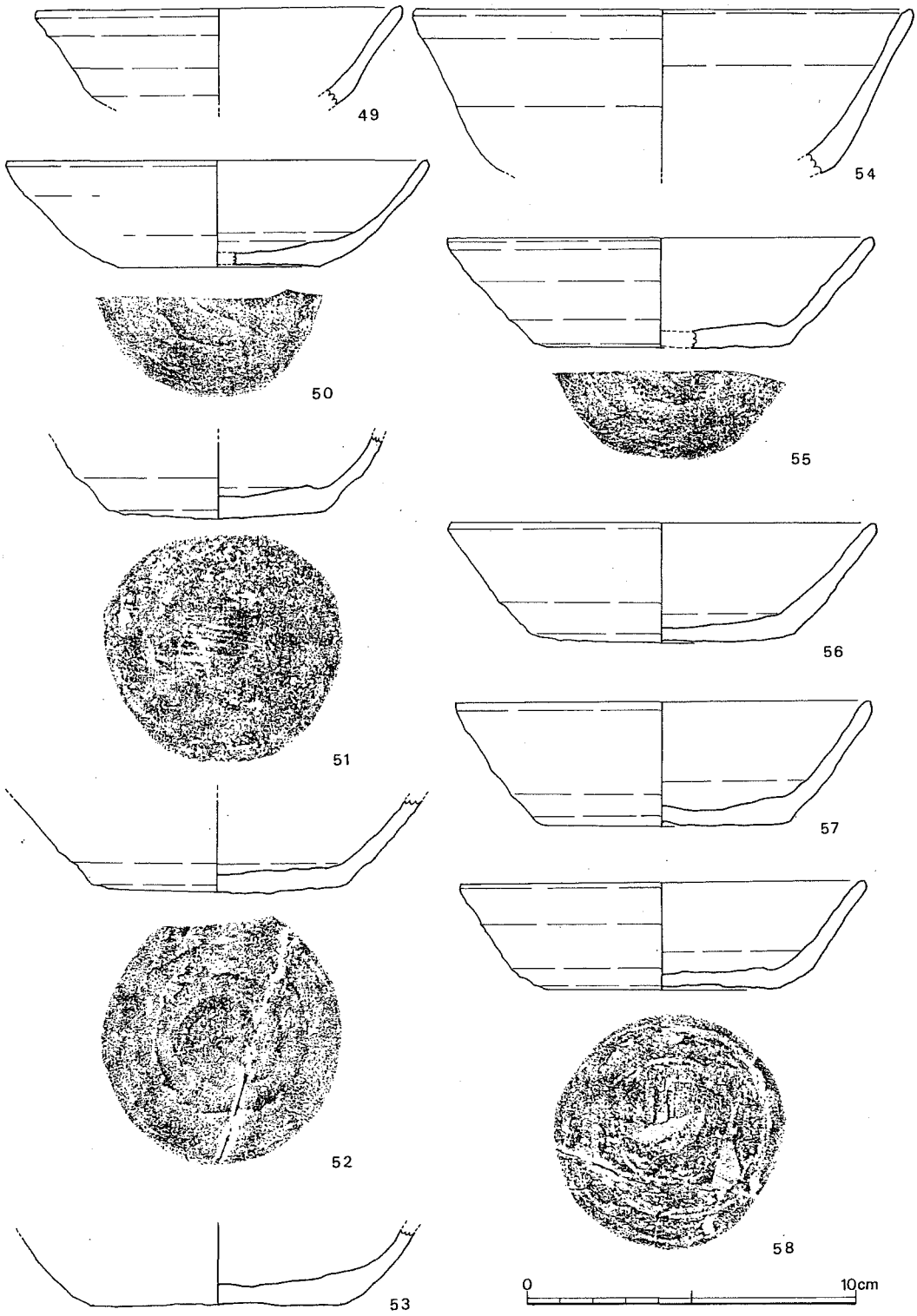
皿は２点しか図示しなかった。しかし小さな破片はかなりの数にのぼっているため量的には多いと思われる。39は器高低く，底から口縁までの立ちあがり部には明瞭な稜線が巡り外反し，口縁は丸くおさめられている。底からヘラ切りで離され，外面全体に丹が塗られている。復原口径13.5㎝を測る。40は胎土に茶色の砂粒が目立つ。底には同心円状の沈線が見られる。この同心円状の沈線は坏の底など数個体に見られ，ともにヘラ切りである。一見糸切か叩きの文様に見えるが，よく観察すると同心円ではなくて渦巻文である。おそらく粘土紐を巻いてロクロにおしつけ，体部をつくりあげ最後にヘラによる切り離しを行ったものである。

**坏**（第10・11図41～58）

坏は割合いまとまって出土している。特にＣ地区では集中した箇所がある。41は皿と坏の中間形態のもので底はヘラ切りで，わずかに尖がり安定を欠く。底部から胴部への立ちあがりは弱く，口縁は直線的に外に開く。42～44は口縁部の形態はほぼ一緒，43が口径が大きい程度で底はヘラ切りである。45～47は器形的にも共通したものがあり，底部は渦巻状の文様がはいる。46については粘土紐が断面に観察される。49，50は口縁端部が丸くおさめられ，内湾する胴部の中ほどにゆるい反りをもつ。49は底部を欠くが，50はヘラ切りで，若干のあげ底となっている。胎土にはヘラ切りのあと板目が残る。54は椀に近い器形であるが器高が低く椀として取り扱った。55は口が直線的に開き，55～57は胴がやや内湾するタイプである。58は口縁がわずかに外反し，底にヘラ切りのあと板目圧痕がわずかに残る。坏の口縁部法量は12.2㎝から12.6㎝のものが多く13㎝を越すものはまれである。




第10図　土師器実測図(3)




第11図　土師器実測図(4)

### ② 中世の遺物

「温泉」と「雲仙」は書き方こそ異なるが，いづれも「うんぜん」と読んでいる。現在「温泉岳」は史跡名勝天然記念物の名称として，「雲仙岳」は普賢岳，国見岳，妙見岳の総称として使用されている。

温泉岳は，古代から島原半島の住民の信仰の霊山として，神の座します山として長く崇められてきた。『温泉山縁起』によれば，この地にある寺院「大乗院満明寺」は大宝元年（701）僧行基によって開山されたと伝えられ，温泉山と号している。

この大乗院満明寺の一山組織として，島原半島各地に多くの麓寺院が建立されている。吾妻町においても例外ではなく，守山地区にも長福寺，西光寺，大源寺，源華寺，蓮光寺などの寺院跡が見える。これらの寺院は平安末期から鎌倉・室町・戦国期にかけて栄えたが，温泉山満明寺の衰退と共に消滅したと推定されている。三室地区の坊屋敷一帯にも寺院跡があったと伝えられ，供養碑も各地に散在している。またこの時期の中国輸入陶磁器，瓦質土器，土師質土器なども採集されており，このことを裏付けている。ただ，蓮光寺跡については，今回の試掘調査において所在の確認は出来なかった。

大園遺跡では，広い範囲にわたって小破片の土師器が表面に散在し，遺構の存在を窺わせたが，この時期につながる明確な遺構は確認できなかった。しかし，２・３の試掘壙においては遺物の出土が見られた。

**中国輸入陶磁器**（第12図１～４）

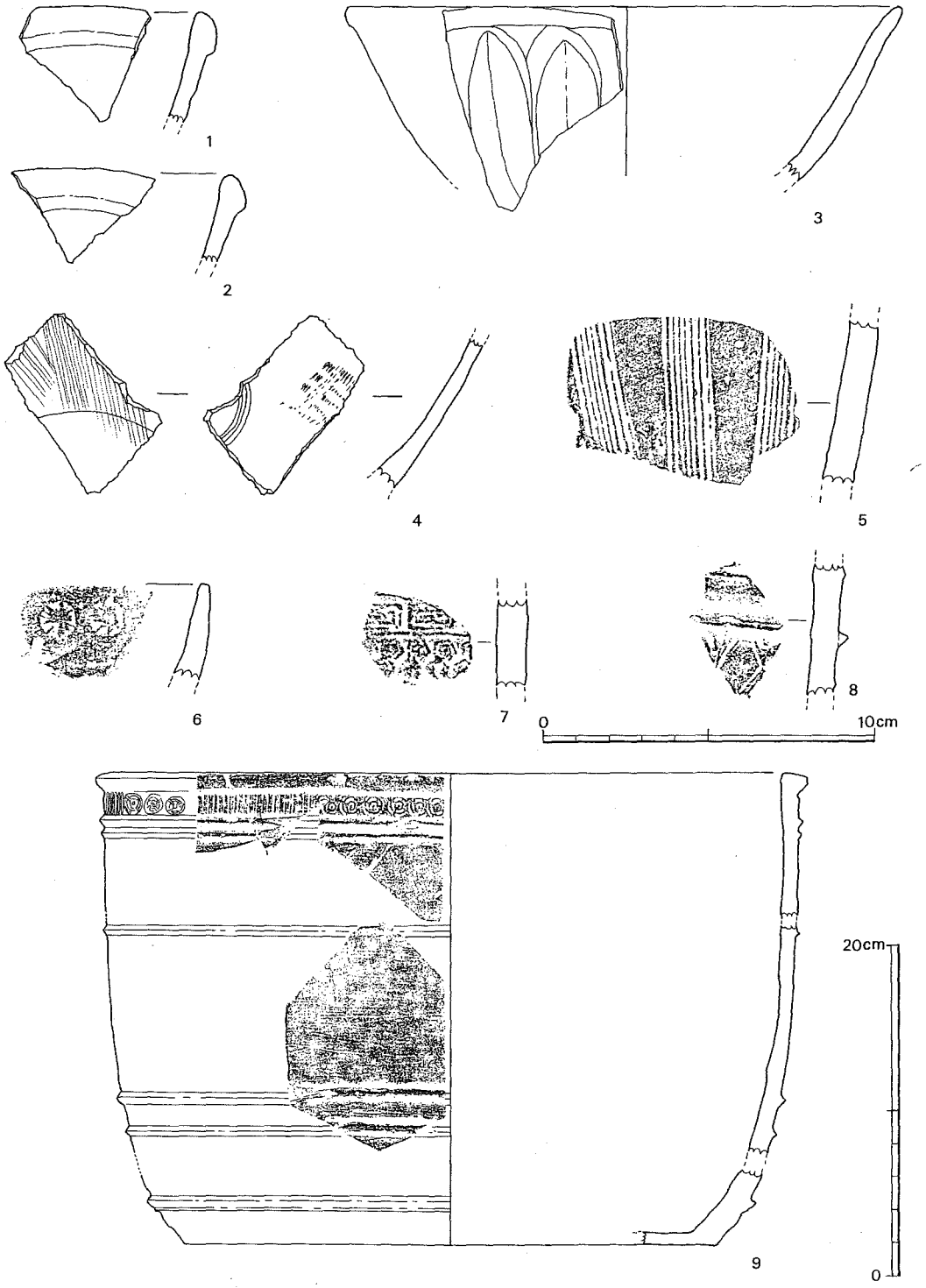
小破片まで入れると十数片を数えるが，図示可能なものは４点である。

１・２は玉縁口縁の白磁碗である。玉縁は比較的小ぶりである。胎土は灰白色で，釉は灰色に近くうすい。森田氏分類ではⅢ類に近いと考えられる。１はＴＰ15・２はＴＰ21出土。３は龍泉窯系青磁椀Ⅰ－５である。外面体部に鎬蓮弁の文様を有する。釉色は極めてよく，淡い緑色を呈する。ＴＰ19出土。４は同安窯系青磁椀Ⅰ類である。外面体部下半には細かい櫛目を有し，施釉は下部まで及ばない。内面は櫛歯による列点と曲った沈線の組み合わせである。釉色は黄緑色で，いわゆる飴色ガラス質である。ＴＰ19出土。

輸入陶磁器の時期については，白磁Ⅲ類が12世紀から13世紀初頭で同安窯系青磁も同時期であり，龍線窯系青磁が13世紀中葉に比定できる。

**瓦質土器**（第12図５～９）

５は擂鉢胴部片である。口縁部を欠き特徴をつかめないが，外面は指頭による整形で若干の凹凸が見られる。内面は繊細な刷毛目調整のあと櫛状の工具で７本単位の沈線が見られる。胎土には滑石状の粉末を含み焼成良好で灰白色を呈する。時期的には不明である。６は浅鉢になると思われる口縁部で外面には菊花文のスタンプが押されている。器形はあまり大きくならない。口縁端部は平坦に納められている。内外とも黒色を呈している。ＴＰ13出土。７は口縁直下の破片と思われるが，雷文を上段に下段に同心同文を２列配し，上下段の間を細い線で区画

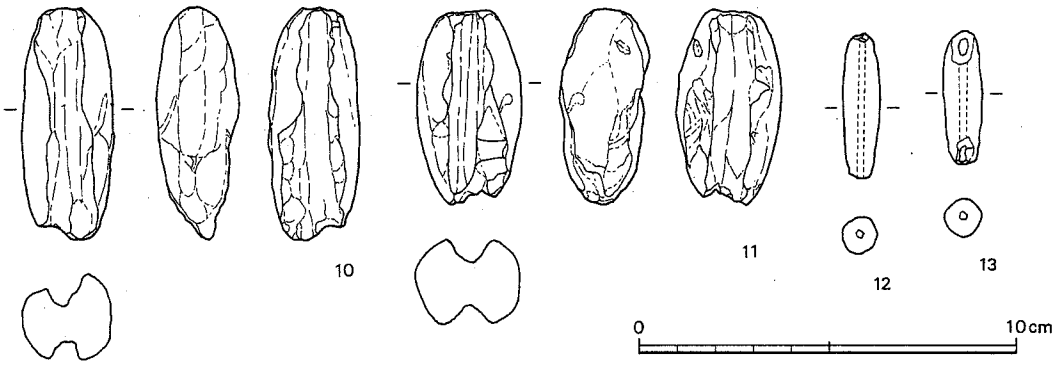



第12図　中世の遺物実測図

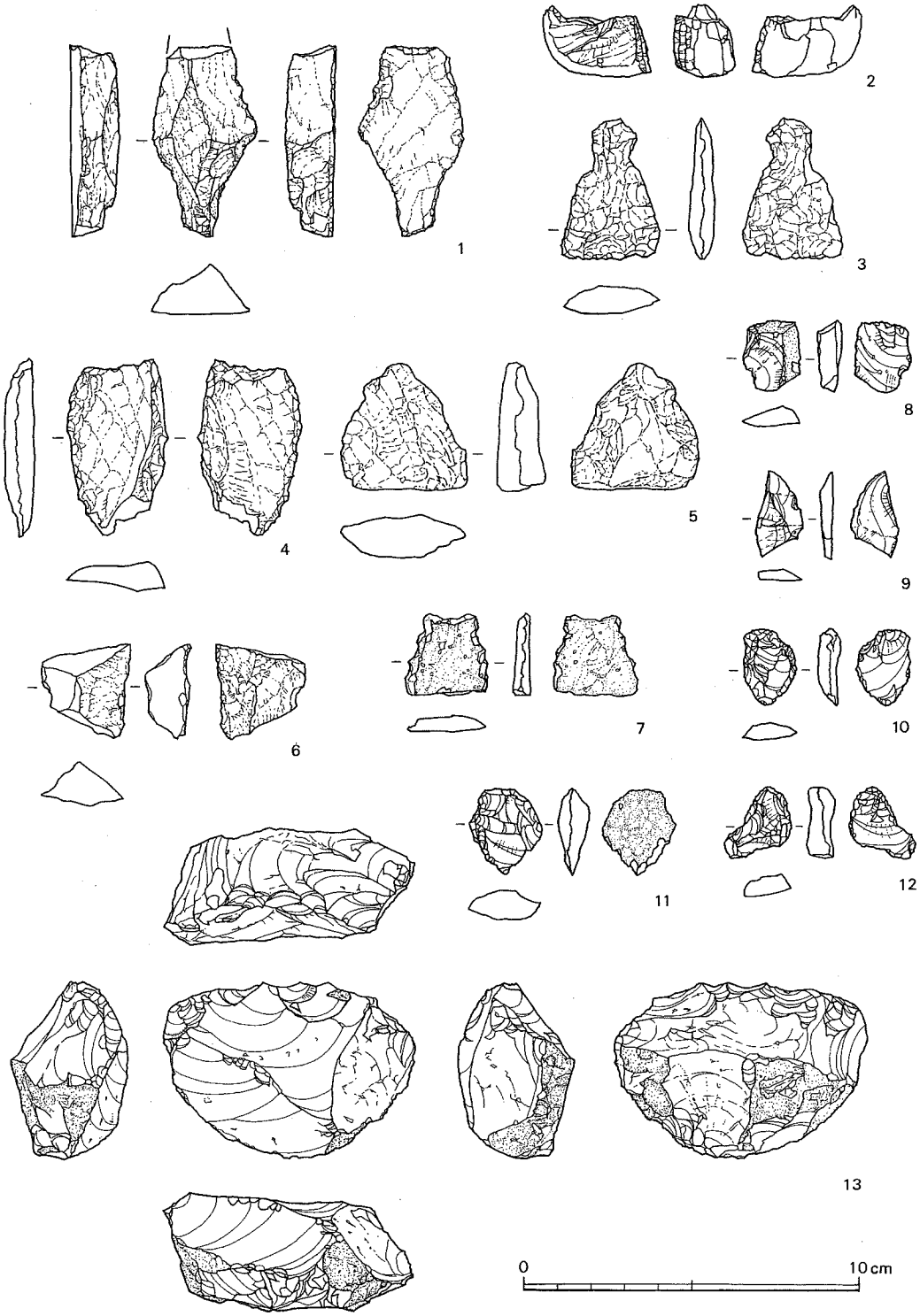
している。小破片ではっきりしないが，即花文である。内外とも黒色を呈している。器形については不明。ＴＰ13，２層出土。８は断面三角形の突帯の下部にくま手状にヘラで沈線が描かれている。この文様は割れではっきりしないが，上下対象に施されると思われる。器形は深鉢状を呈し，内外とも黒色。ＴＰ22出土。９は遺構からの出土である。この遺構は，拳大の礫を土壙に多量に入れ込み，その中に混っての出土である。しかし，堀り込みは２層からで，近世陶磁器も混じり中世までは至らない。遺物そのものは１個体が割られて廃棄された状態で接合できるものも多く，図上復原可能である。火舎かも知れない。底部は平底であるため一応ここでは深鉢として取扱っておく。口縁は断面三角形で，平坦部はわずかに外傾する。頸部には２条の突帯が巡り，口縁との間には同心同文に十字を入れたスタンプが押され，同心円文と同心円文の間には沈線が短く縦に入れられ，文様構成に変化をつけている。胴部下端の底部に近い方にも２条の突帯が見える。復原口径43㎝，深さ約28㎝の大形である。胎土には滑石状の粉末が入り，色調は黒灰色を呈する。時期的には14世紀後半に位置する。

**土錘**（第13図10～13）

４個の土錘が得られている。10・11は犬塚周辺，12・13はＤ・Ｆ区２層からである。前者は穿孔ではなく，両面に紐が通る抉りを入れ，断面を分銅型にしている。胎土はよく精選され堅く焼かれ，表面は磨かれている。網の錘と考えられる。重さは10が24kg，11は20ｇを測る。12・13は管状土錘である。両端部が使用により破損している。この形状の土錘は中世の遺跡からは殆どで出土しており，時期的にも幅がある。ただ10・11についてはあまり類例がなく，時期的には後続のものと思われる。




第13図　土錘実測図




第14図　その他の石器実測図

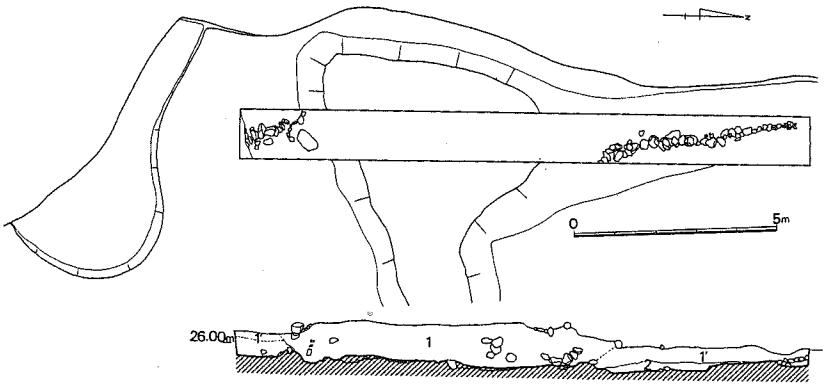
③　その他の石器

ここにあげた石器は，今回の時代背景とは違ったものであり，旧石器時代から縄文時代にかけてのものである。１は剝片尖頭器である。サヌカイトを素材としており，上端部を欠く。基部は両側から打撃を加え細くしている。片面は１回の加撃で剝がれている。刃部は断面三角形を呈する。３は灰黒色の黒曜石でつまみが付いており石匙である。縦形の小ぶりだが全体は丁寧に剝離されている。４は横剝き剝片を利用したスクレイパーである。刃部は両面に剝離痕が見られる。石質はサヌカイト。５は玄武岩と思われるが，磨耗が著しい。片面だけはポイント状に剝離されている。下部を欠失している。６・７はサヌカイト製剝片，他は黒曜石製のほとんどが剝片である。13は黒曜石利用の石核である，やや不純物を含み黒灰色である。一部に自然面が見られるが，角礫状の原石を用いていると思われる。島原半島には各地域産の黒曜石が持ち込まれており，今後同定を進める必要がある。

## 2　犬塚古墳

現況は礫が約1.2m程の高さで細長く積み上げられている。この塚も古田正隆氏によって試掘調査が行なわれている。その記録によると，すでにこの地は地元の人により１m内外に深く堀り下げられ他の畑の礫とともに埋められ，一部は礫を積み上げたとされ，完全破壊の様相を呈していたという。掘り下げる以前の状況は，犬塚の隣を塚山と呼び，犬塚は現在の状況より約１m高く竹が茂っていた。蛇が多かったため長年にわたり少しずつ掘り起こしてはそこに礫を埋めたという。

今回は，南北に幅1.5m，長さ20mにわたりトレンチを入れたが，畑の境界と思われる石列が見られ，断面を見る限り先の調査時と同じで古墳と断定する状況ではない。しかし，遺物は礫に混じり，須恵器片や中世土器片，石鍋片などがみられ，以前は現在より高まりがあったということからすると古墳の存在も考えられる。




第15図　犬塚古墳実測図

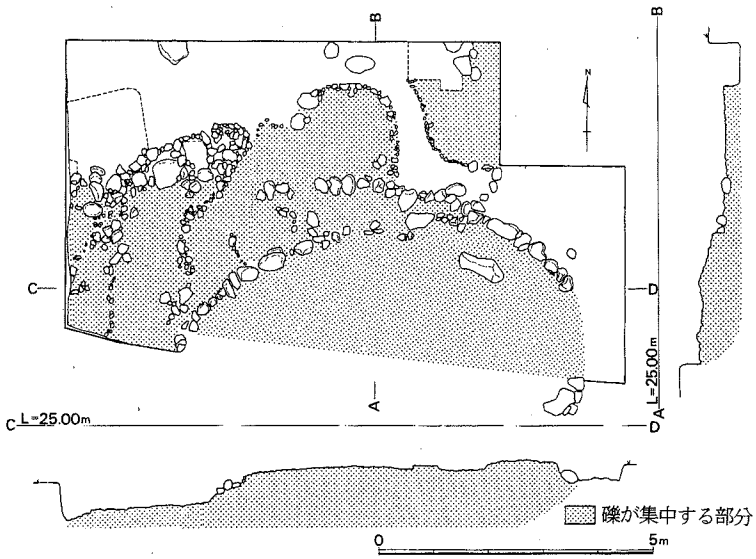
### 3　猫塚古墳

円墳と伝えられる猫塚は，畑の一隅に半円形に平坦に残るが，昭和50年頃の農道付設で小高い部分が削られ，離合場所として利用されたため，古墳の形状を呈していない。墳丘部の調査は過去に古田正隆氏の試掘調査がある。その際は，開口方向や構造等は不明とされているが，人頭大の礫を死床面とし，出土須恵器から古墳時代終末期に比定されている。

今回の調査では塚の北側半分とその周囲を全面的に剝いだ。その結果，表土は農道として利用するため割り石が敷かれていた。その下層からは拳大以下の礫を葺いた状態が認められ，さらに下層には，粘土層が積まれていた。しかし，その下は自然の礫層で先の調査で古田氏が死床と考えられた礫は，地山層の礫であることが判明した。また，墳丘残存部では，石室に伴う石の抜き取り痕などは確認できず，当初から石室を持たない墳墓の可能性が強い。裾部には築造当初からと思われる大礫が１列に並べて置かれ，土留めの役割を果たしているようである。さらに北側前面に敷き詰められた礫群と強い関連を示すものと思われる。

遺物は表面で数点確認されたのみで，下層からは，中世の須恵質土器や輸入陶磁器，土師質土器片が出土した。また，表土層を掘り込んだ面からは近世以降埋められた猫の骨が数個体バラバラで出土した。これは，飼い猫が死んだら塚に葬ったという地元の話と符号するもので，猫塚の由来もここに起因すると思われる。また，墳丘の径を出すべく南側の畑にトレンチを入れたが，すぐ地山層に達し，北裾部で見られる大礫も無く径は確認出来なかった。

調査の結果，猫塚はこれまで伝えられてきた古墳というよりも，中世頃に築造された経塚的な意味合いを持つ遺構ではないかと思われる。そう考えることによって，北側前面の礫群の状況も繋りが生きてくると考えられる。




第16図　猫塚古墳実測図

## 4　坂上遺跡

遺跡は大園遺跡などが乗る，標高102m～114mのなだらかな台地上に，広範囲に位置する。試掘調査は全体を25mメッシュに区切り，２m×２mの試掘壙を49箇所設定した。試掘壙には，標高の高いところから低いところへと１・２・３……の記号を付した。

調査の結果49箇所の試掘壙のうち，33箇所から縄文時代早期の押型文土器と，石器類が出土した。このあたりの地形は南から北に向かって傾斜しているが，細部には小さな谷状の凹地が入り組み，台地の東西は大きく崖状に落ち込みを見せている。

また，坂上遺跡から300m下方の下鬼塚石棺では，石棺は消滅して発見出来なかった。しかし，ここでも坂上遺跡と同様の押型文土器の包含層が確認され，この周辺にも遺跡の広がりが考えられる。

### 土　層

土層は火山灰の堆積が見られ，基本的には４層に分かれる。

第１層は表土層

第２層は黄褐色土層，火山灰土で黄色が強くサクサクしている。土器や石器を包む遺物包含層である。

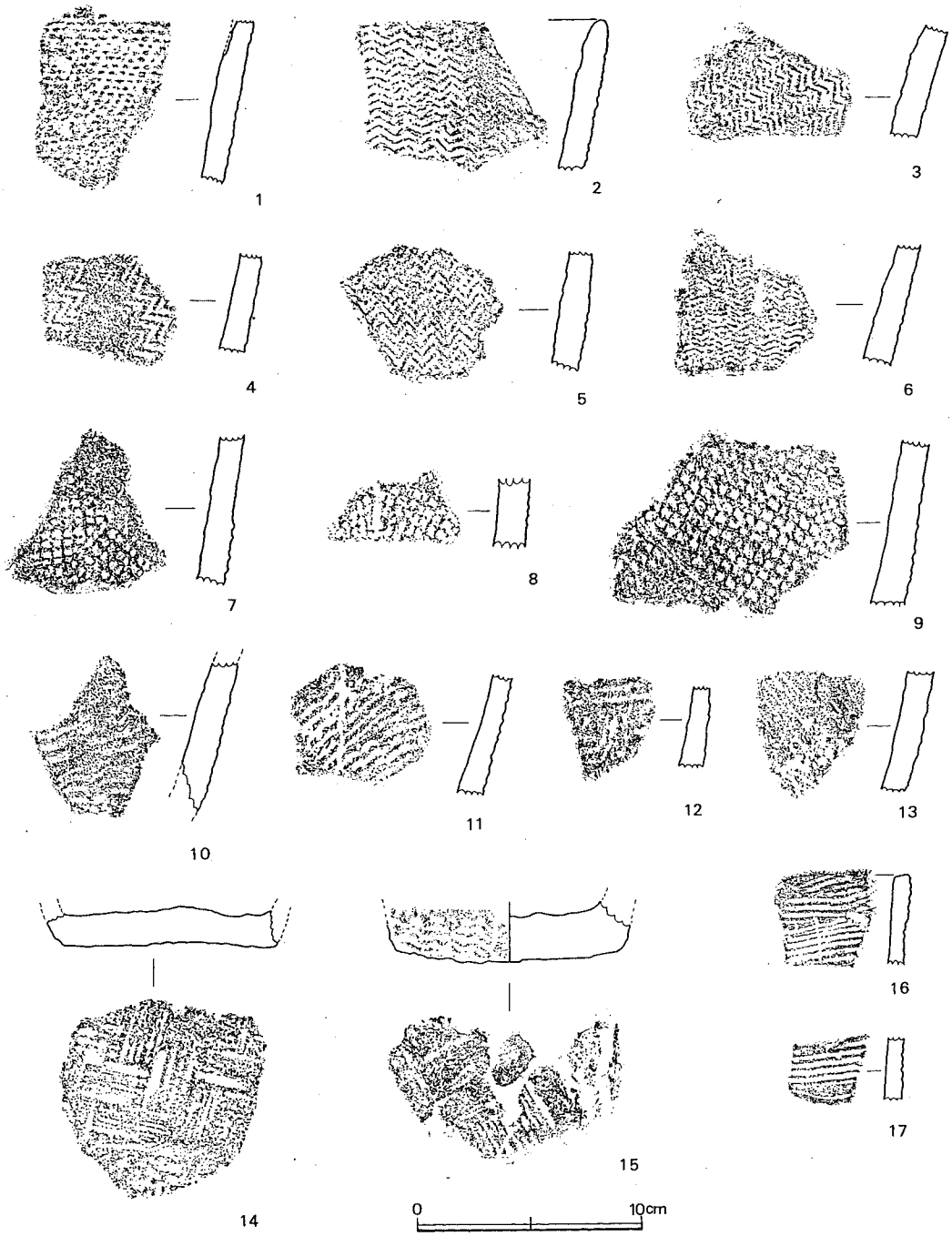
第３層は黒色土層，黒色のしまりのない土で，２層と同じく火山灰層である。遺物はこの層の上部からも出土する。

第４層は明黄褐色粘質土層，粘質が強く上層と較べるとよくしまっている。遺物は出土しない。

### 遺　物

#### (1)　土　　器

調査によって得られた土器は，押型文あるいはその系統に属するものである。１は楕円押型文である。比較的小さな楕円で，幅２㎝，６条の横位ころがしが見られる。胎土には角閃石や白い砂粒が目立つ。焼成はよいが，表面はやや磨耗し脆い。２は山形押型文口縁部で，やや間のびした原体を横位にころがしている。文様は外面のみで内面には施されない。胎土・焼成とも良好である。３は山型押型文で斜めにころがしている。胎土には粗い砂粒と角閃石を含む。焼成やや甘く脆い。４はやや彫りの深い山形押型文で斜めにころがしているが，施文に空間がある。胎土焼成は良好。６は浅い山形押型文で横位にころがしている。山形はやや間のびし，浅い。胎土焼成は良好。割れ目下端は接合部ではずれている。７～９は格子目押型文である。７・８はほぼ同一の規格で，全面施文ではない。９は前者に較べ格子目が大きく粗い。器壁も厚いことから大形の器形になると思われる。胎土焼成とも良好である。10は山形押型文が退化し，ゆるい波状文になったものである。一見条痕様に見える。器壁厚く底部に近いと思われる。11は粗い条痕文である。器形は円筒形に近いと思われる。焼成甘く，脆い。12は浅い沈線様のものが入る。13も同じように浅い沈線様のものがかすかに認められる。胎土には粗い砂粒が含




第17図　坂上遺跡出土の土器実測図

まれ，焼成甘く磨耗著しい。14・15は底部である。14は立ち上がり部を欠く平底であるが，全体にはアンペラ状圧痕が付いている。内面はあげ底にもりあがり，指頭整形されている。胎土には角閃石や石英，白い砂粒などを含み堅く焼成されている。15も平底で立ち上がり部がわずかに残る。底にはアンペラ状圧痕が付き，胴部は山形押型文が施文される。胎土焼成とも良好である。16・17は同一個体と思われる破片である。16は口縁部が平坦に納められわずかに内側に傾く。内外とも磨くように整形されたあと，外側は条痕というより沈線に近い押引き文様が施文され，ゆるい波状の間に菱形状の弧を付けている事が観察される。内面は指頭によるナデが見られる。胎土には細かい砂粒ばかりで精選されている。色調は黄褐色で焼成はやや甘い。この土器は押型文系統の土器とは明らかに違うようであるが，搬入品かも知れない。

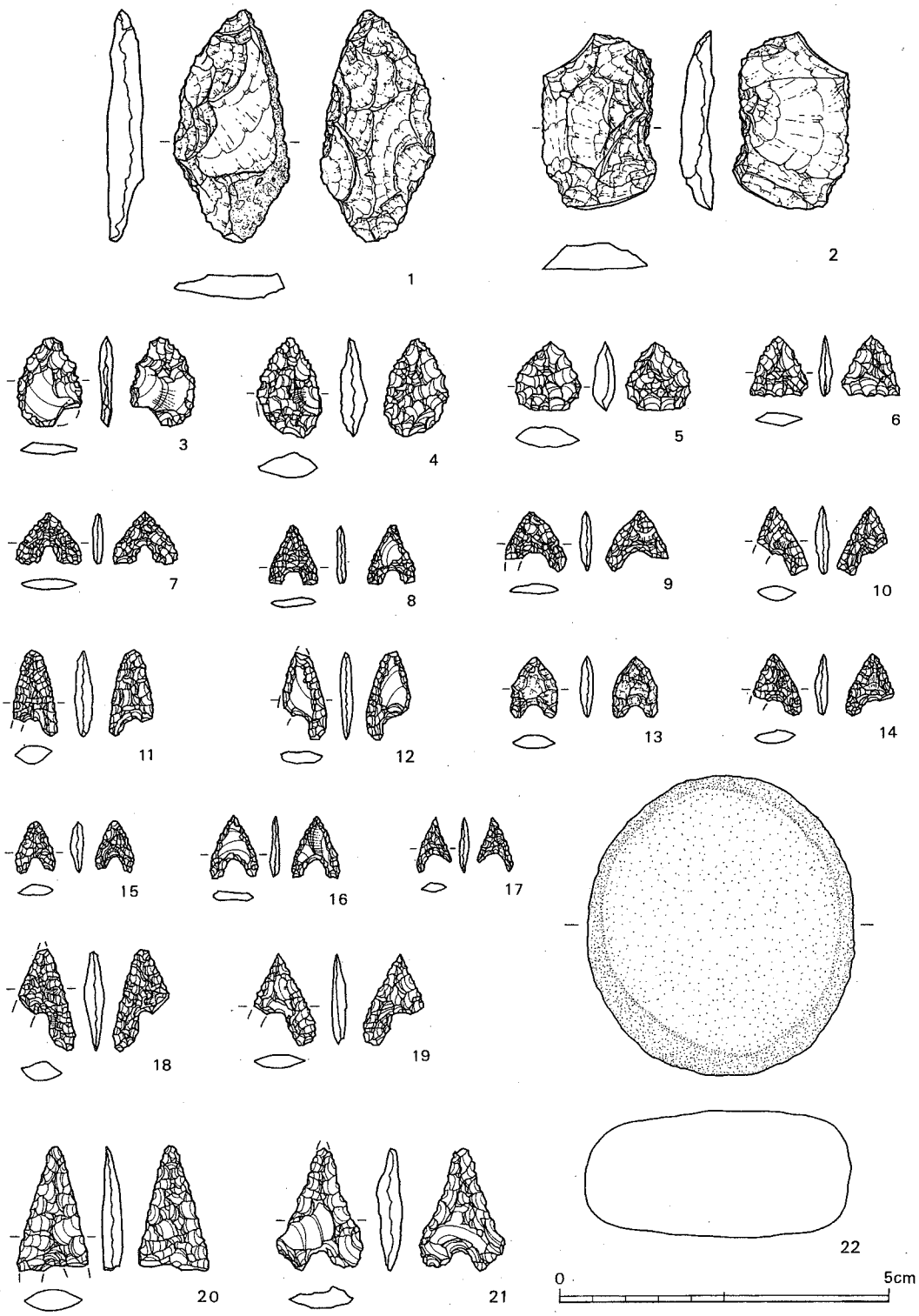
以上，坂上遺跡の土器を概観した。試掘調査において，これだけ良好な状態で出土することから，面的には早期単純遺跡としていろんな角度からの成果が期待できると考えられる。

島原半島には押型文土器を出土する遺跡は多いが，発掘資料として報告されるまとまった遺跡はさほど多くなく，同町内の弘法原遺跡と，国見町百花台遺跡があげられる。特に弘法原遺跡の場合，押型文土器の単純遺跡であり標高こそ差があるものの，立地は類似しており，指呼の距離にある。

出土土器の比較では前者の場合，各押型文土器の比率は山形文土器が86％，楕円押形文は5.2％，格子目文は7.1％の順になっている。本遺跡の場合，単純に考えても同じ傾向と考えられ，時期的にもほぼ同時期であり，相互間の交流は常にあったものと思われるが，定期的な場所の移動により形成された遺跡と考える方が自然といえる。

**石　器**

発掘調査によって得られたものは少なく，ほとんどが表採資料である。ブロックごとに黒曜石が濃密に分布しており，地元の人の話からも，これまで多くの石器が採集されているという。1・2はサヌカイト製で，1は側面に自然面をもち片側面に両面から打撃を加えたスクレイパーである。2は使用痕ある剥片である。3～5は黒曜石を素材としたスクレイパーである。3は剥片を利用し，周縁を入念に加工，中央に大きな剥離痕を残す。他も全体を押圧剥離で入念に加工，断面は凸レンズ状に先端を鋭利に尖がらせている。6から21は石鏃。有茎鏃と無茎鏃に区別されるが，前者が圧倒的に多い。石材は各原産地の黒曜石が多いが，サヌカイト質のものも見られる。8についてはチャート質である。また，形態分類もかなりの形式に分かれている。弘法原遺跡では26種類に区分されているが，本遺跡でもそれに準じてよい。22は安山岩製の磨石である。両面と側面を全面的に磨いている。表採資料では多くの磨石が得られている。




第18図　坂上遺跡出土の石器

# Ⅳ まとめ

古墳時代の長崎県は，高塚古墳の割合が壱岐・対馬に集中して約60％を占め，本土部においては諫早湾から島原半島全体では62箇所11％に達する。なかでも半島北岸の愛野町から島原市にかけては38箇所を数える。しかし，初期のいわゆる前期古墳は確認されておらず，多くは円墳である。半島内には数基の前方後円墳があるが，本遺跡のすぐ近接した地点には，水田中に守山大塚古墳が位置する。現在は墓地として利用され，破壊が進んでいるが，現存長66mを測り，推定復原長は70mを越え，本土部最大値を示す。時期的には不明だが，頂部より石棺が出たという話も伝わり，真実とすれば前期まで遡る可能性も考えられる。

大園遺跡の調査は，明確な縄文時代や弥生時代の遺構や遺物の発見はされなかった。しかし，出土した遺構や遺物の多くは，古墳時代終末ごろから平安時代にかけてである。また猫塚，犬塚は古墳としての確証は得られなかったが，状況的には否定することも出来なかった。

島原半島地域に古墳が比較的多く築造されている原因として何が考えられるであろうか。先ず第１には雲仙火山の裾野に広がる平野部の存在であり，水量の豊富さは農業を容易ならしめたと考えられる。律令体制下の条里区割りの現存する地区は，吾妻町守山地区をはじめ，瑞穂町伊古，国見町神代（こうじろ）～土黒（ひじくろ）というように古墳の集中と一致している。第２には，前面の有明海を中心とした交易活動が盛んに行われていたことであろう。ただ，有明海を隔てた小長井町や高来町では肥前地方の影響を受けた線刻画が見られるが，こちらまでは及んでいない。肥後地方で盛んな横穴や，絵画を描いた古墳の影響も見られない。

今回調査の中心となった守山地区も，古代においてはまとまりをもった地域であり，条里遺構の存在がそのことを示している。古墳では犬塚，猫塚の他にも，保存することになった横山古墳，今では形を変えてしまった杉山古墳や上原古墳，隣接するコロ松古墳などが平野部を見下す位置に築造されている。これらの古墳のほとんどは６世紀末頃から７世紀のものである。

大園遺跡では何の変化もない畑地の，わずか15mの範囲に集中して遺物が出土した訳である。皿や坏，椀は比較的残りのよいものもあるが，須恵器については大きな破片があるものの，壊されたと思われるものが殆どである。そしてこれら遺物の下からは，同時期と考えられる柱穴が確認されるが，建物の復原までには至っていない。柱穴は本調査区南側や，東側に点在する試掘壙からも確認されていないので，狭い範囲の遺構と思われる。

集落という性格よりも，墳墓に関係した遺構といえるのかも知れない。

平安時代から中世にかけては，この一帯に寺院が点在していたことは先に述べたが，中心は標高の低い所であったようで，輸入陶磁器などの遺物が得られている。今後は寺院の所在の確認も必要となってくるだろう。

# 図　　版

図版 1

大園遺跡調査近景

調 査 風 景

図版 2

試掘調査風景

C区土層（南壁）

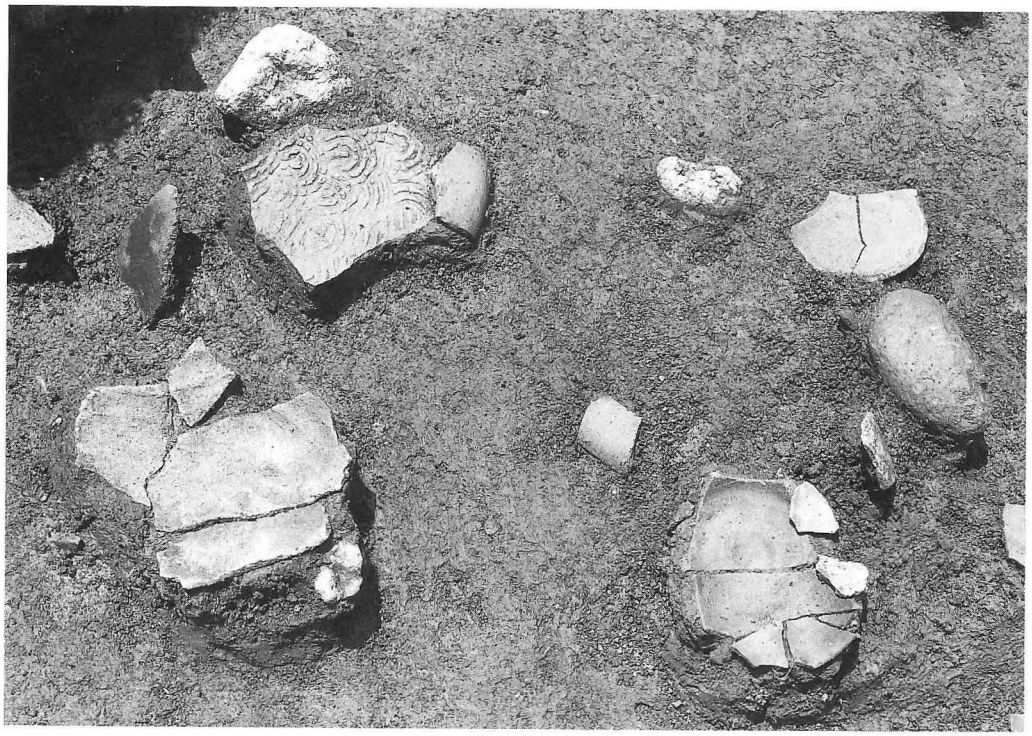
C区土層（東壁）

図版 4

遺構検出状況

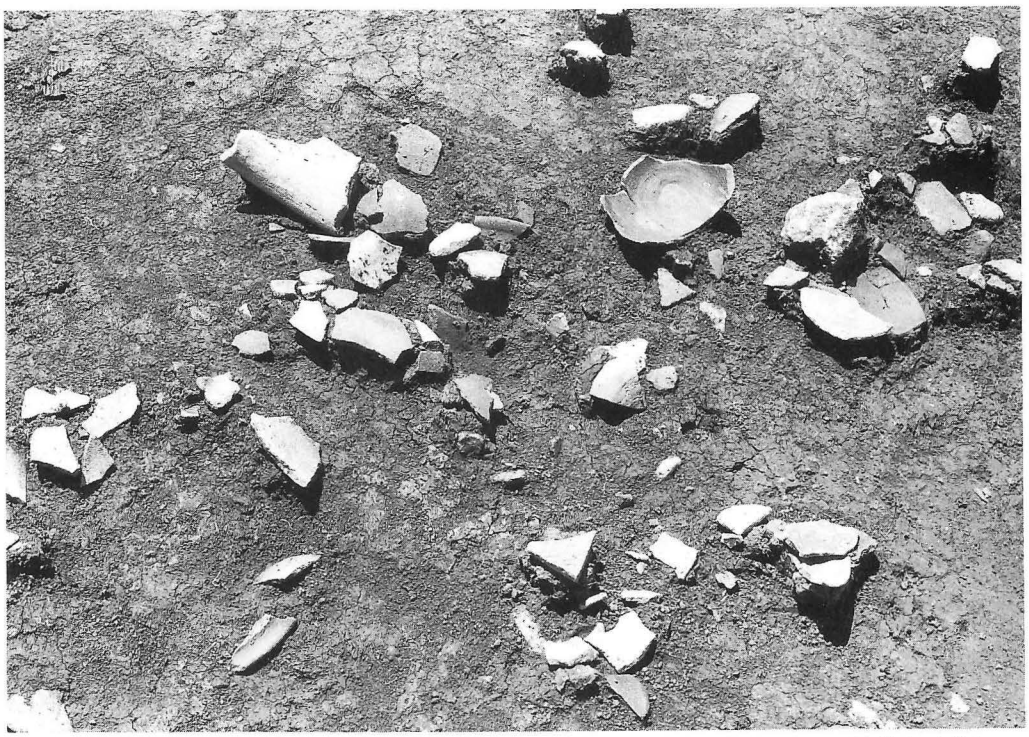
中世土壙

遺物出土状況



遺物出土状況

図版 6



遺物出土状況

遺物出土状況

土　　層

犬塚古墳調査風景

図版 8

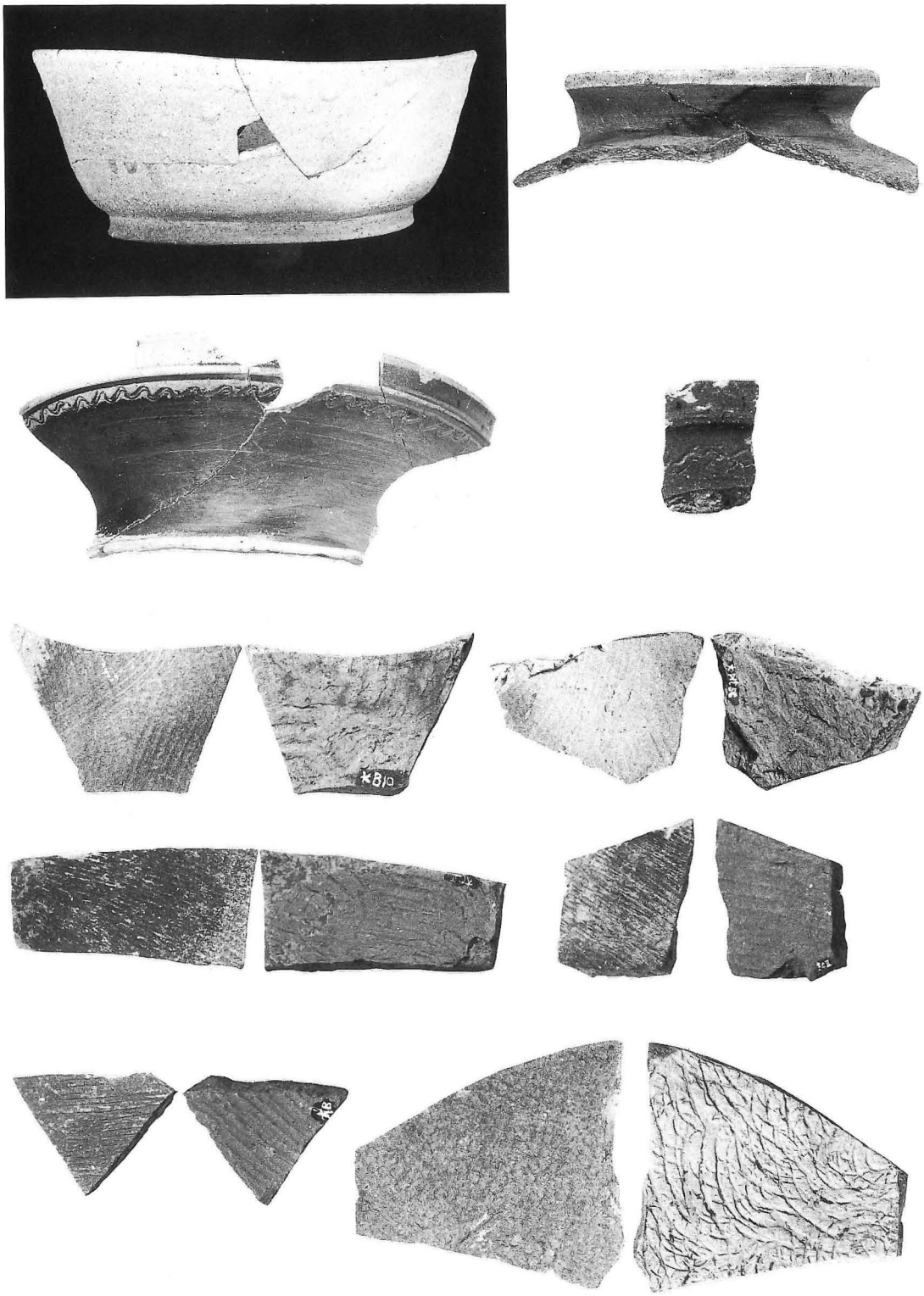
猫塚古墳遠景

猫塚古墳礫群検出状況

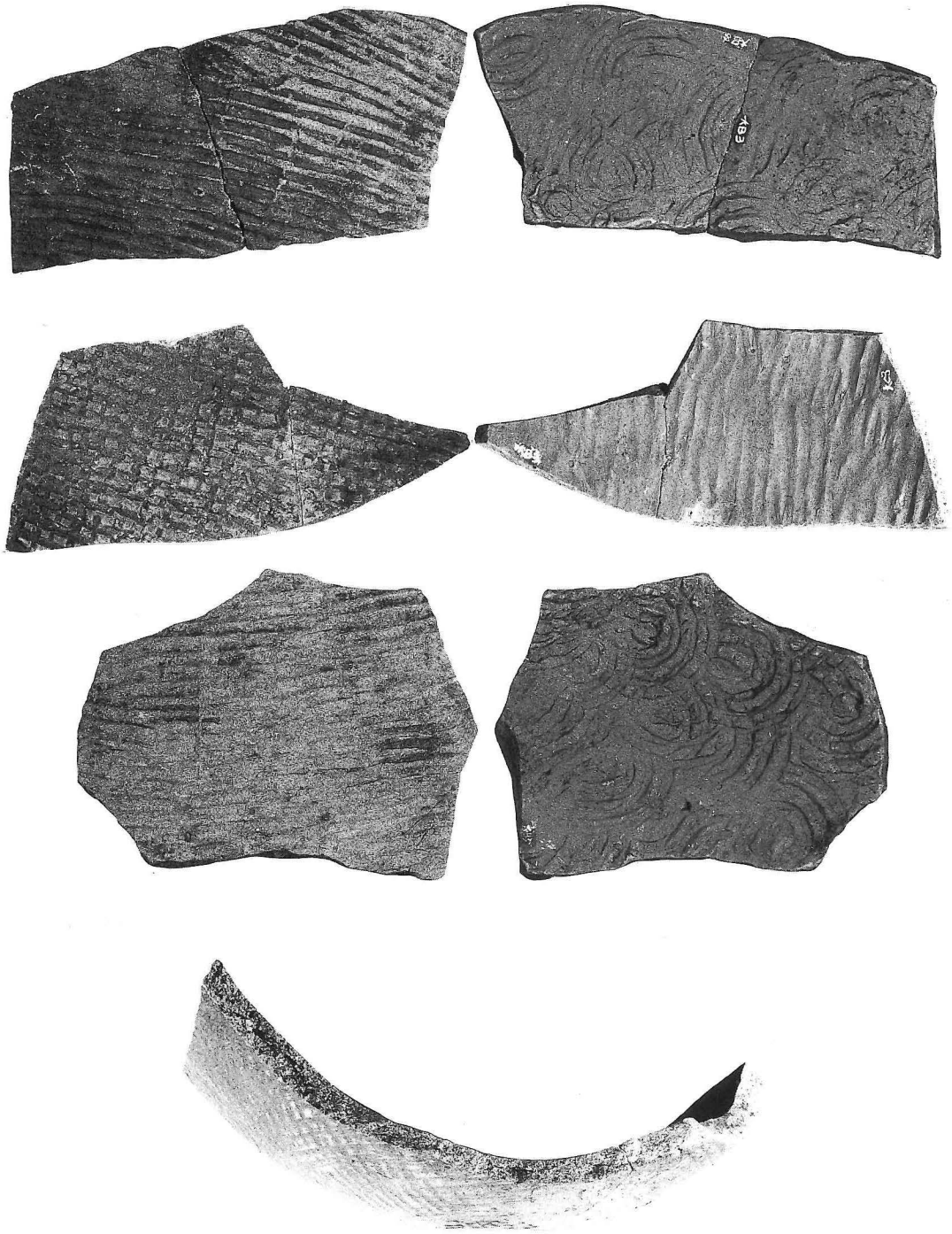
坂上遺跡遠景

第38試掘壙遺物出土状況

図版10

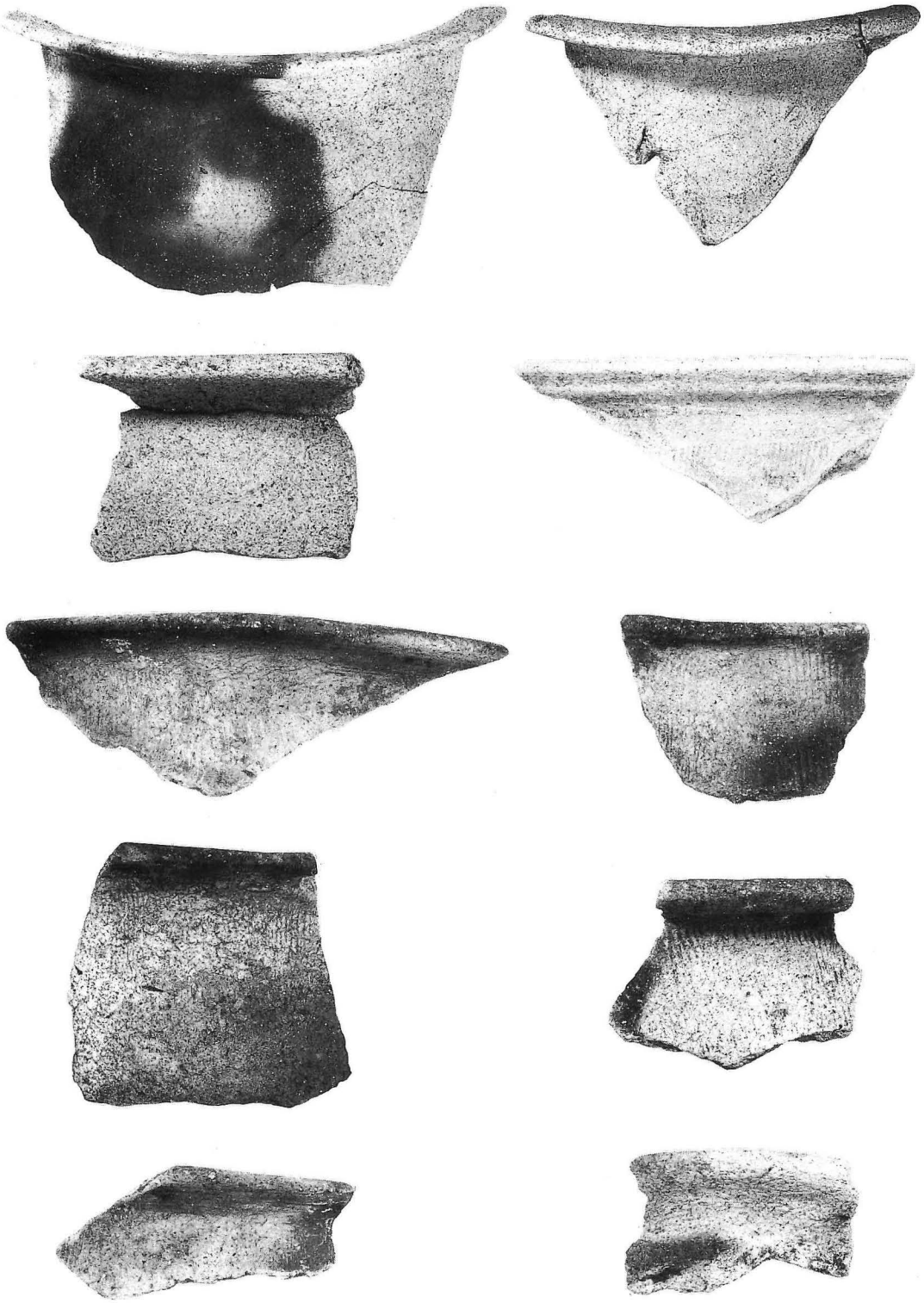


須恵器(1)

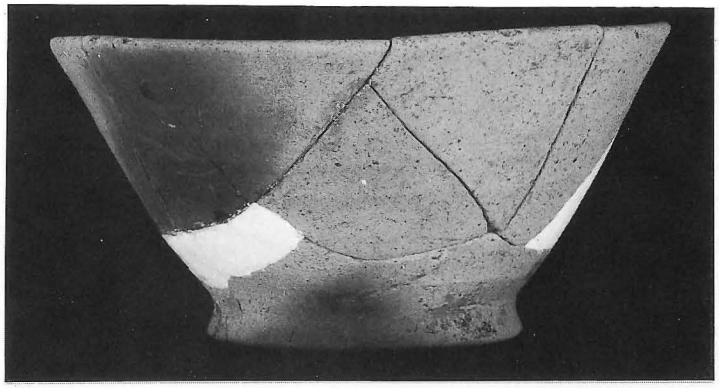


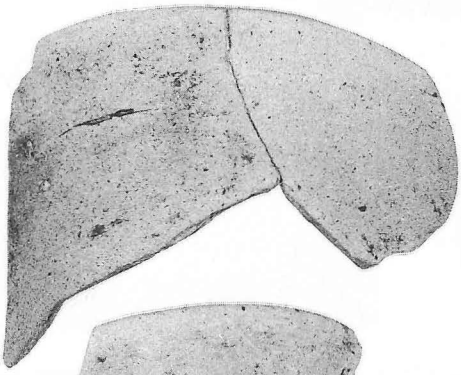
須恵器(2)

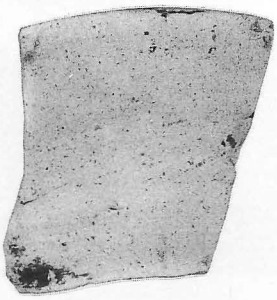
図版12

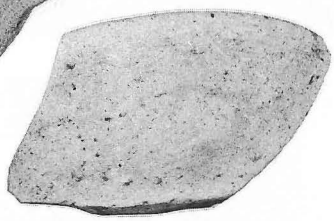


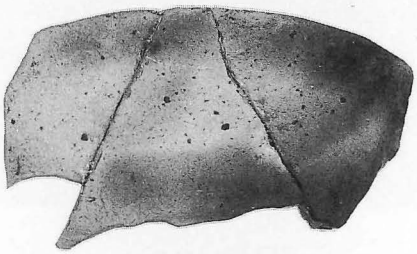
土師器(1)

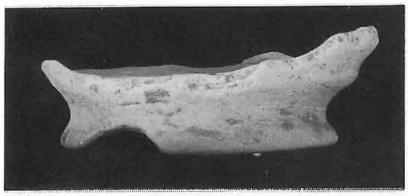


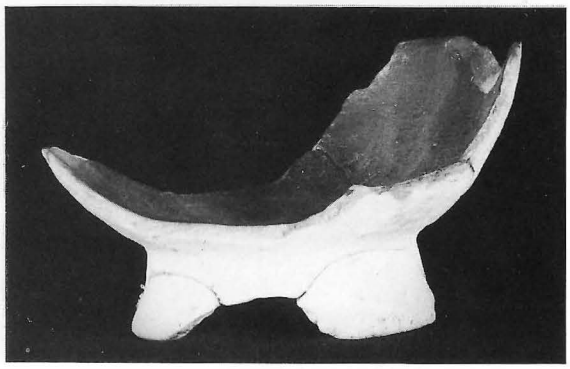






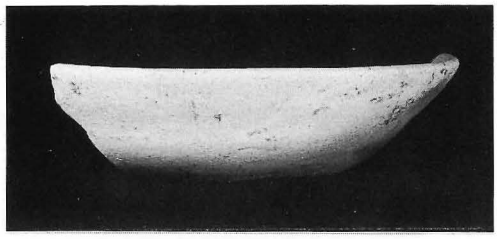


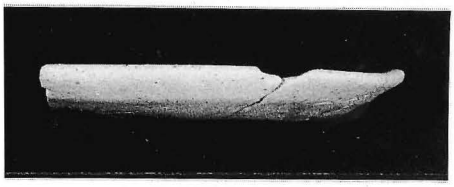


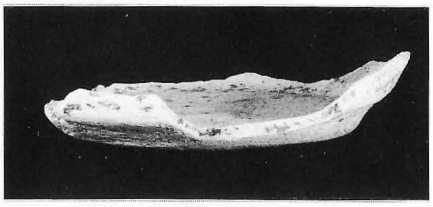


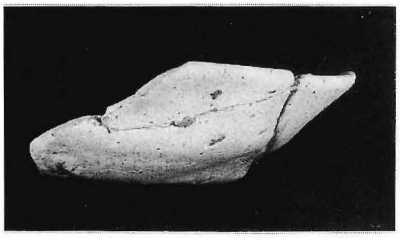
土師器(2)

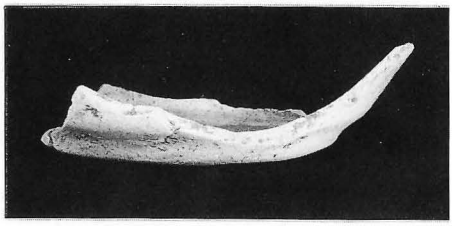
図版14

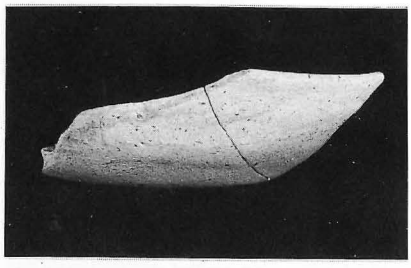


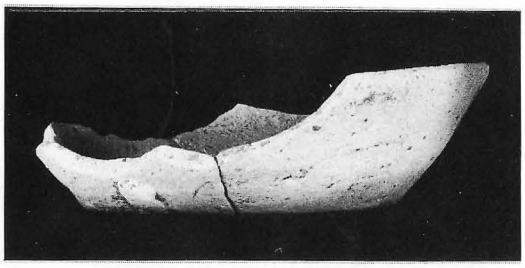


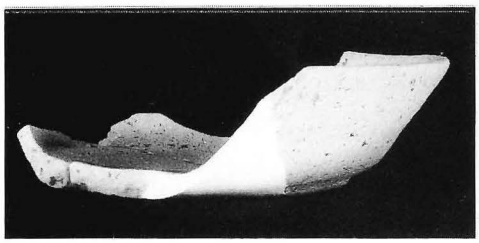


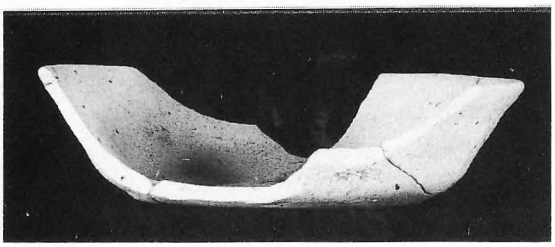




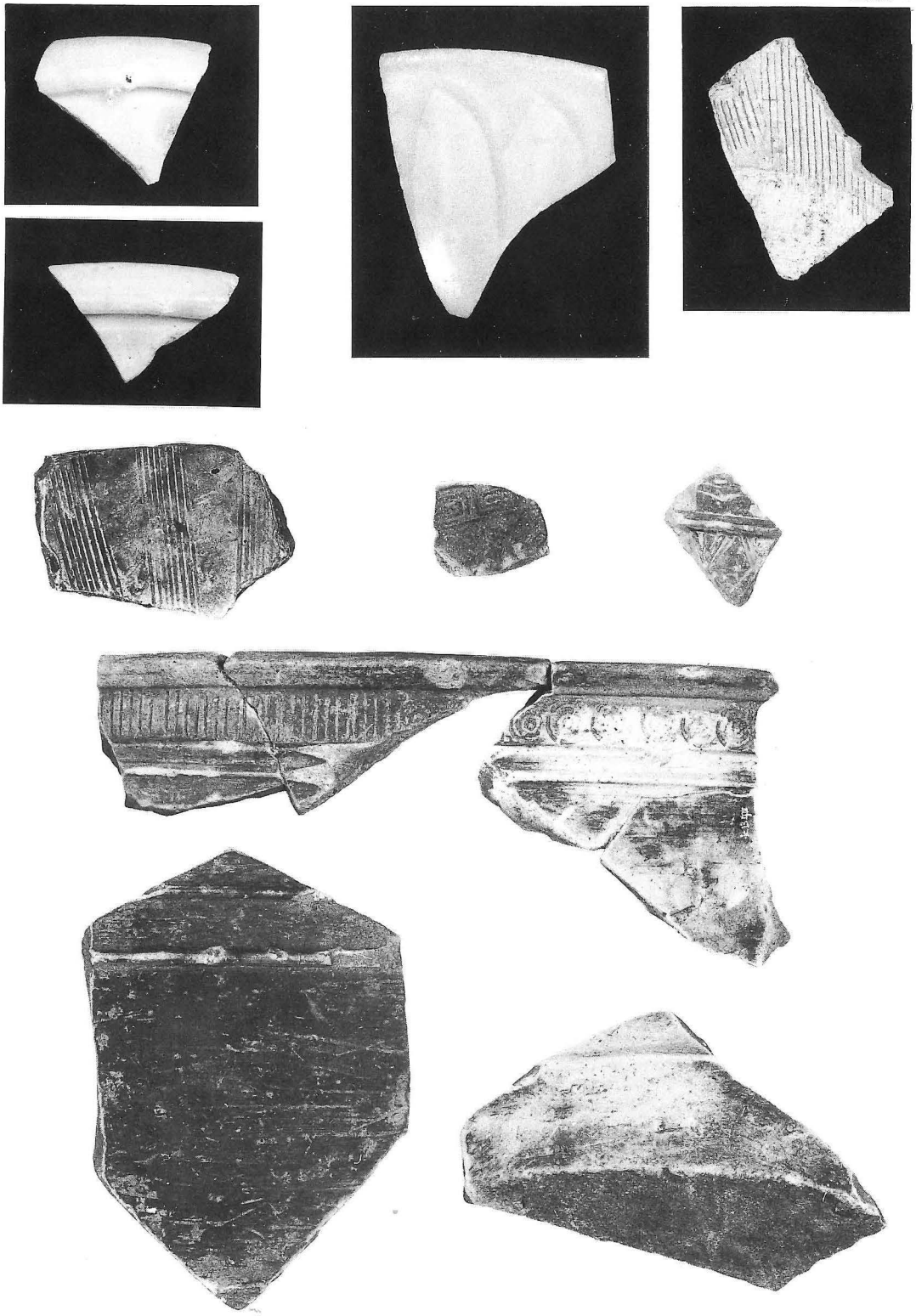






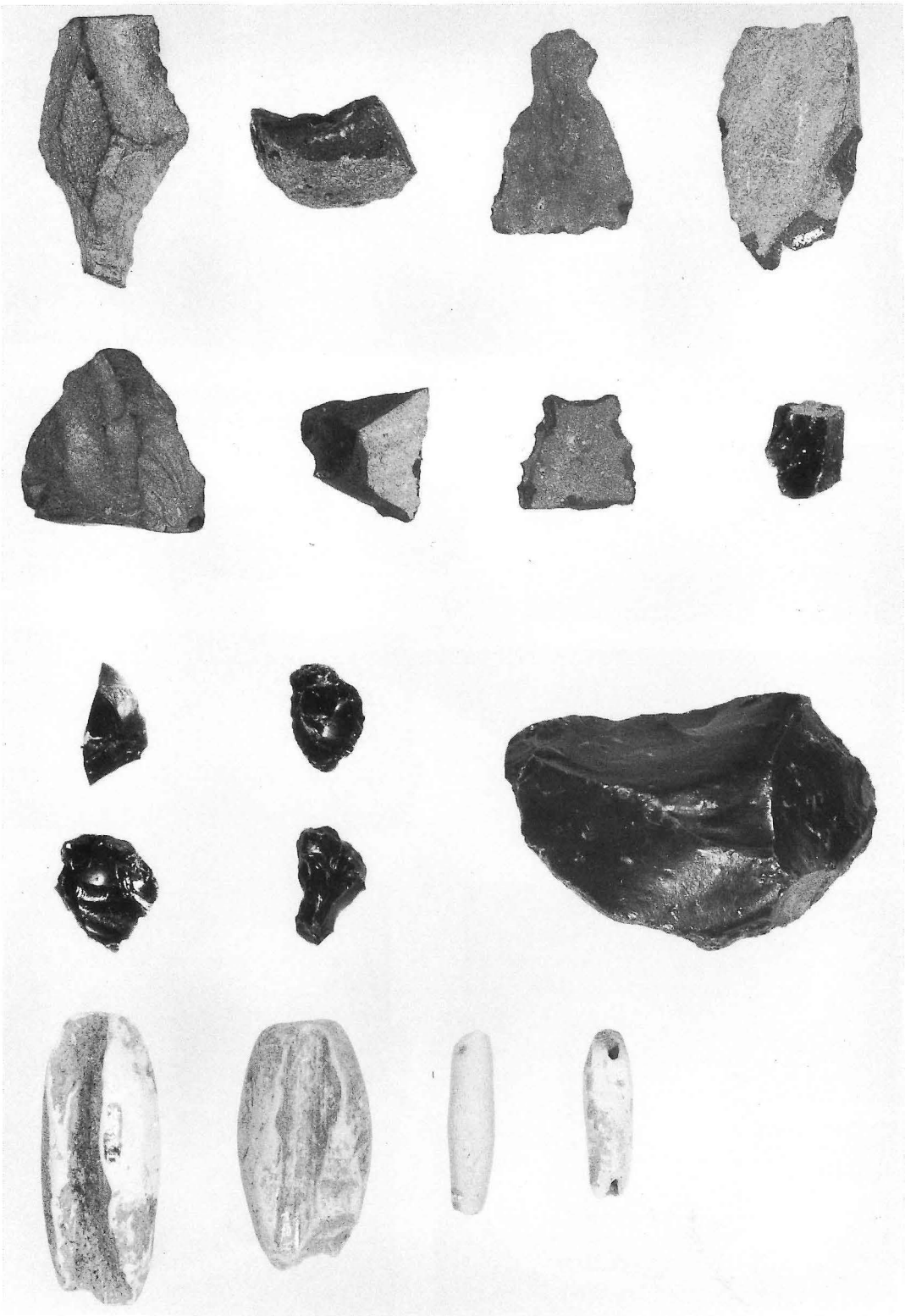


土 師 器 (3)

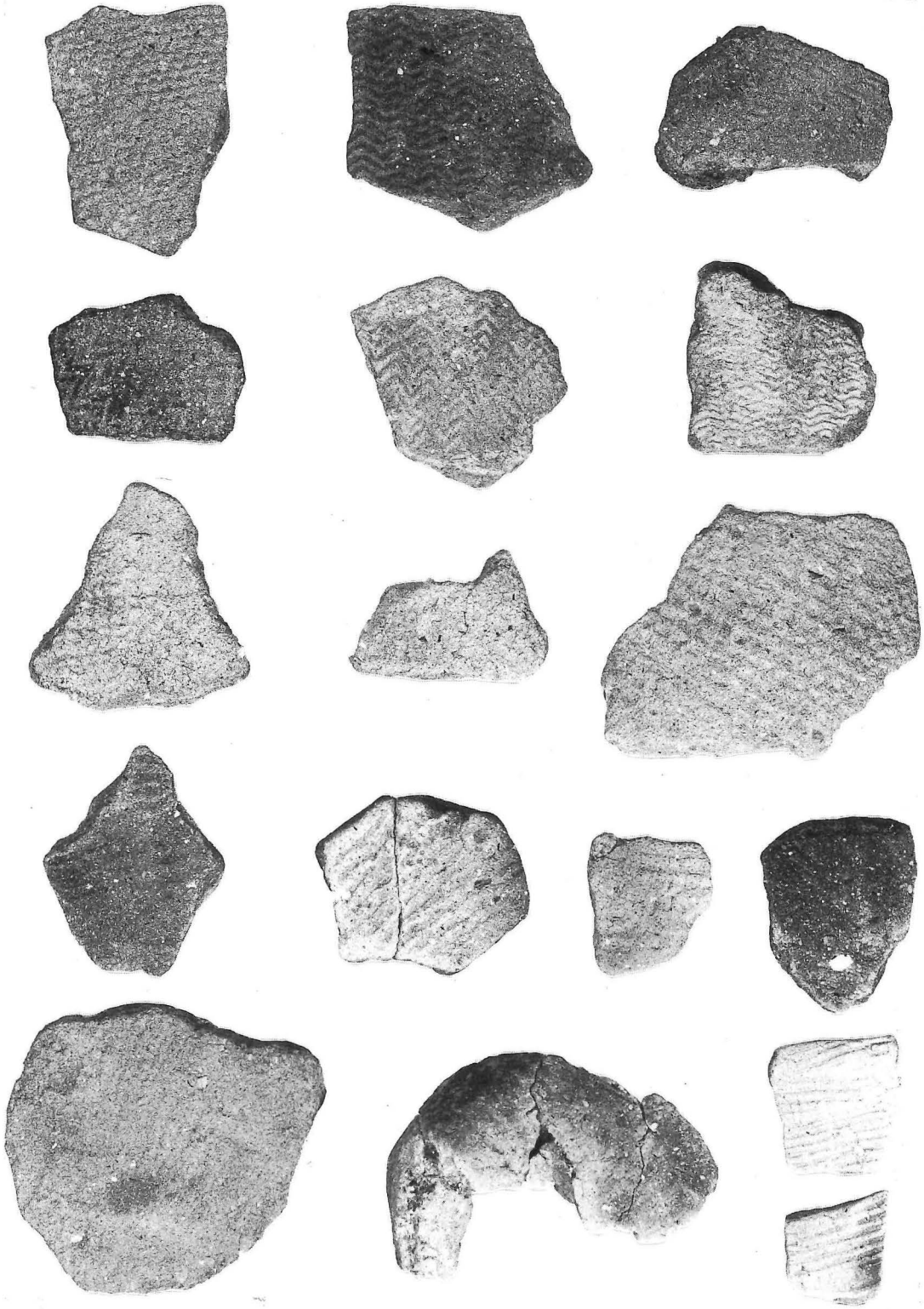


中世の土器

図版16

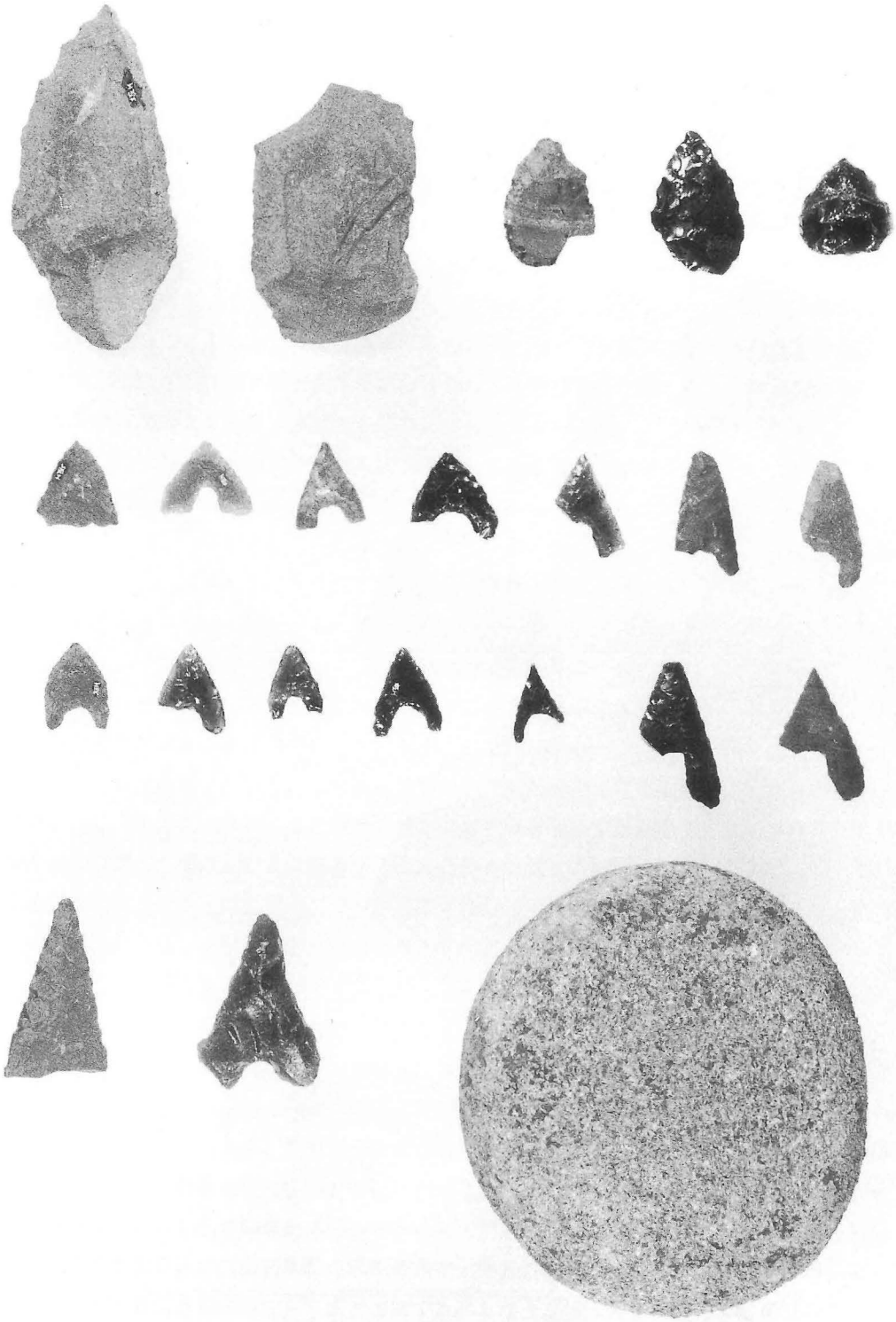


その他の石器



坂上遺跡出土の押型文土器

図版18



坂上遺跡出土の石器

吾妻町の文化財第12集

守山地区県営圃場整備事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告

平成3年3月30日発行

発行所　吾妻町教育委員会
長崎県南高来町吾妻町大木場名63番地
〒859－11　☎0957－38－3108

印刷所　昭和堂印刷
長崎県諫早市長野町1007－2
〒854　☎0957－22－6000㈹